ティア活動」の影響から、将来は青年海外協力隊員としてボランティア活動をしてみたいと考える生徒が多くなった。その気持ちがさめないように、啓発活動を継続していきたい。

課題としては、以下のような事が考えられる。ガーナのカカオ農園では5歳～14歳の子どもがカカオの収穫や加工に携わっているという。70g前後のチョコレート価格は、日本で100円、ガーナでは60円程度である。ガーナの物価や日本への輸送料等を考えると、日本のチョコレートの価格はガーナと比較して、激安になるだろう。その背景には、低賃金で働く子どもの存在が見え隠れする。「1枚のガーナチョコレートから」や「ガーナの小学校へ行こう！」の単元で、こういったアプローチができれば、南北問題や児童労働力などガーナの抱えている課題がさらに明確になるだろう。

「カカオ豆貿易ゲーム」では、自給用の農作物よりも輸出用の農作物を優先する事によって、主食の生産がおろそかになるという視点を見落としていた。この視点を授業に生かすためには、ガーナにおけるキャッサバ等の主食の生産が、どのようになっているのかを調査する必要がある。この視点を加える事で「カカオ豆貿易ゲーム」は、さらに奥深いものになると考える。

今回は、社会科と道徳を関連付けた授業構成にした。学習指導要領解説道徳編の「改訂の経緯」には、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」が第一にあげられている。また、学習指導要領解説社会科編の「改定の趣旨」には、「日本人としての自覚を持ち、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力を育成することを重視して内容の改善を図る」とある。よって、道徳と社会科を関連付けた実践は、意味のあるものだと考える。しかし、道徳は道徳価値観と絡めて動機付けをするもの、社会科は社会認識を通して公民的資質を培う教科である。このように目的が違う。「横断的な学習」として位置づける事は簡単ではあると思うが、社会科と道徳の区別をどのように明確化するかが課題となるだろう。

参考資料・取材協力等

第1時
・新しい社会　地理　東京書籍
・中学校社会科地図
・Basic Social Studies Atlas for GHANA　LONGMAN

第2時
・ヒューマン・ライツ　－楽しい活動事例集－　グラハム・パイク、ディヴィッド・セルビー　赤石書店

第3時
・国際協力　2003　9月号　国際協力機構
・FAO農産物貿易年報　国際連合食糧農業機関（FAO）編

第4時～第6時
・国際協力　2003　9月号　国際協力機構
・開発教育・国際理解教育ハンドブック　（財）国際協力推進協会
・日本チョコレート・ココア協会Webページ
・ロッテ株式会社Webページ

第7時
・地球家族「意志あるところ、道は通じる～ガーナ・アチュワ村にて～」（ビデオ資料）　国際協力機構
・クロスロード（1989年4月号）「意志あるところ、道は通じる」～ガーナ・アチュワ村にて～　武辺寛則
・国際ボランティア貯金のパンフレット　日本郵政公社

第8時
・子どもによる子どものための「子どもの権利条約」　小口尚子、福岡鮎美　小学館

第9時
・NHK　週間こどもニュース「アフリカの子供を救え」（2003年11月15日放送）

資料　1時限

1　ガーナへ行こう！1　ワークシート

ガーナへ行こう！（1日目）ワークシート

組　番　氏名

これから「ガーナへ行こう！」の学習をします。1年生のときと同じように、1時間目はパスポート、ガーナの現地通貨（セディー）等の準備を行います。
さっそく、ガーナに行くための準備にとりかかりましょう。

1．パスポートの準備
必要事項を記入してパスポートを準備します。ガーナに行くためには、黄熱（ビダ）、黄熱病の予防接種が必要です。黄熱病の予防接種は省略しますが、ビダは受けます。パスポートとビダの準備が出来たら、次の段階に進みます。

2．目的地の下調べ
・ガーナの首都を目指します。ガーナとガーナの首都を地図帳で探し、下に記入してください。

ガーナの首都は（アクラ　）で、緯度はおよそ（北緯5　）度、経度はおよそ（　0　）度

・経度を調べたら、日本とガーナの首都の時差を計算し、自分の時間をガーナ時間に合わせます。
ガーナの経度は（　0　度）、日本の標準時になる経度は（東経135度）
よって式（　135－0　　）の答となる。経度（135）度で1時間の時差があるので、式（135÷15　　）で（＝9　）時間の時差になる。

・気候を調べます。雨量が多いので、平均気温・雨量を読み取って、もって行く服装を準備します。

11月の平均気温は（約30　）度、雨量はおよそ（約50　）mm。よって、もって行く衣類は、（半　）袖のシャツ（10　）枚で、その他必要なものは（雨傘・雨合羽　　）。

3．現地通貨への両替
現地通貨はセディー（日本円を日でわるようにセディーは0でわらいます。）に両替をしなければなりません。現地用語として、セディーを日本で両替することは、ほとんど不可能ですが、今回は、出発前に両替することにします。

（20％手数料）

日本通貨（	25000	）円を
ガーナ通貨（	2000000	）Cに両替して下さい。

氏名

4．感想記入欄

今までテレビなどで「円高」や「円安」の言葉を聞いても意味が分からなかったけど今日の授業をやって意味が分かったのでこれからテレビを見た時に理解できるので嬉しいです。

資料　2時限

2　ガーナへ行こう！2　ワークシート

ガーナへ行こう！　2　ワークプリント

組　番　氏名

これから「権利の熱気球ゲーム」を行います。
ルールを守って参加してください。

ルール

1．お、いすの移動をすばやく、静かに班をつくります。
2．司会者と発表者を決めてください。
3．皆さんの道具は、熱気球に乗ってゆっくり上昇しています。
4．熱気球には、8つの「権利」が使嗾されています。
5．「権利」は、1つにつき2kgの重さがあります。
6．気温が下がったり、寒天候になったときには、浮力を保つために捨り（権利）を捨てなければなりません。
7．何を捨てるかは、司会者が中心になって話し合いをします。不必要なものから順番に捨てていってください。
8．捨てた権利には、捨てた順番に（　）の中に数字を1．2．3．・・・と記入してください。なぜその順番になったのかの理由も、簡単に記入してください。
9．ゲームの終盤アクラに到着したらゲームは終了です。すべての皆り（権利）を捨てる前に、到着する場合もありますので、捨てる皆り（権利）は慎重に選んでください。

権利	順番	理由
・好きな音楽を聞く権利	（ 4 ）・・	（自分で歌えば良いから。）
・十分な食べ物と安全な水を与えられる権利	（ 3 ）・・	（これがないと生きていけないから。）
・テレビ・コンピュータゲームをする権利	（ 7 ）・・	（無くても困らないから。）
・好きなスポーツをする権利	（ 2 ）・・	（疲れたらスポーツで運動する。）
・小・中学校で教育を受ける権利	（ 5 ）・・	（勉強がないと、苦手にならないから。）
・小・中学校で教科書を無償で配布される権利	（ 8 ）・・	（教科書がなくても、友だちに借りればいいから。）

ゲーム終了後、発表者が黒板に出て、自分の班が捨てた権利を順番に並べ替えてください。また、捨てられないで権利が残った場合は、残した理由も書えてください。

感想記入欄

やっぱり、十分な食べ物と、安全な水を与えられる権利と、教育を受ける権利は、どの班にも大切して残っていたものだったので、生きる上で、本当に必要な権利だと思った。日本ではこの権利が当たり前になっているが、ガーナでは、この権利が当たり前なのだろうか？？　俺ずっと分からも考えて思います。

資料　3時限

3　1枚のガーナチョコレートから1　ワークシート

1枚のガーナチョコレートから1ワークプリント

組　番　氏名

今日は、カカオ農園とカカオ豆の流通などを管理している政府の機関であるココア・ボードという役所へ行きます。気付いたことや分かったことを、プリントに記入していきましょう。

1．カカオ農園へ行って分かったこと
ラクアさんが、ガーナにカカオを持ってくる（1879年）アクラの土がカカオ栽培に向きなかったため、アクロフン周辺で栽培した。プランテーションの葉で囲んで、6日間発酵させる。その後、約8日～22日間太陽にあてて乾燥させる。その後豆ないて、皮をかく。1本の木で、1年間に1kg位くらいとれる。

2．ココア・ボード（ガーナ政府のカカオ豆に関する仕事をしている役所）に行って分かったこと
カカオ豆をいて、皮をかいて加熱するとペーストになり、それを固めたものがココリカいら、これをほ煎すると、ココバターというものとココケーキというものに分ける。ココケーキをくだくとココアパウダーに、色をまぜるとチョコレートになる。

3．別紙の資料を見て、カカオ豆の輸出（生産）について分かることは何ですか。
他の国と比べて、ガーナはカカオ豆の生産量がかなり多い。（世界2位）

4．別紙の資料を見て、チョコレートの輸出（生産）について分かることは何ですか。
ガーナはクラフトにのっていない。つまり消費が少ない。
ガーナはチョコレートおよび製品の輸出額が日本などに比べてとても少ない。

5．3番と4番から見出される矛盾や疑問はどのようなことですか。
ガーナはカカオ豆の生産は世界で2位なのに、チョコレートの消費量やチョコレートおよび製品の輸出額が日本などより少ないのはなぜか。

6．学習課題

めあて・・・ガーナはカカオ豆の生産量が世界で2位なのに、チョコレート消費量は少なく、チョコレート輸出量も非常に少ないのか？

7．予想する

ガーナでは、カカオ豆をチョコレートに加工する技術があまり発達していないのではないか。また、カカオ豆をチョコレート以外の何か別のものに加工しているのではないか。もしくは、カカオ豆をそのまま外国に輸出しているから。

資料　4～6時限

4　1枚のガーナチョコレートから2～4　ワークシート

1枚のガーナチョコレートから2～4（カカオ豆貿易ゲーム）ワークプリント

組　番　氏名

カカオ豆貿易ゲームは3時間かけて行います。次の時間も使いますので、大切に保管してください。ゲームを行うときに一番大切なことは、ルールを守ることです。ルールを守って有意義な学習にしましょう。
前時までに学習課題（めあて）の確認をしよう。

めあて・・・なぜガーナはもっと豆の生産量が多いのに、チョコレートの消費量と輸出量が少ないのか。

カカオ豆貿易ゲームのルール
・与えられた条件は違うが、A国、B国ともお金を一番稼げたチームを勝ちとする。
・与えられた道具と船乗、消しゴム以外を使用してはならない。
・A国の持ち金はなし。B国の持ち金は、100ドル。
・A国は、カカオ豆の殻を利用してはさみで切り抜き、クレパスで色を塗ったら出荷できる。
・B国は、カカオ豆を商社から買い取り、その裏にクレパスで色を塗り、チョコレートの型紙で切り取ったら出荷できる。
・カカオ豆は、商社が10個を10ドルで買い取る。（カカオ農園では、80kg単位で出荷しているから。）
・チョコレートは、商社が1箱（カカオ豆1つから1箱生産できるものとする）を10ドルで買い取る。
・商社はB国に6箱20ドルでカカオ豆を売る。
・各国間の交渉は、ルールで制限されたもの以外は自由。
・原材料であるカカオ豆の型紙、紙、クレパスは、他国に貸したり売ったりしてはいけない。
・商品（カカオ豆、チョコレート）を輸出する場合は、必ず商社を通すこと。
・カカオ豆やチョコレートが不出来の場合は、商社は買い取りを拒否する場合もある。
・ゲーム中の生徒から質問は、一切受け付けない。
・1時限目の終わりに、中間発表をする。
・制限時間がきたら、手持ち金（最初の持ち金を差し引いた額）を指導者に報告する。
・すべてのグループの収支一覧を掲示し、ゲームは終了する。

1．岩たちは、（　B　）国グループ。
2．中間発表時の利益は（　40　）ドルで、（　4　）チーム中（　1　）位。
3．1時限目の反省と、さらに利益を上げるための対策を下に記入する。

どんどんものを捨てて、作り過ぎて、値段が安くなってきて、まずいなかった。それに、値段が上がっていく。もっと（重量）を減らす。

4．最終利益は（　70　）ドルで、（　4　）チーム中（　2　）位。
5．カカオ豆貿易ゲームを通じて気付いたことや感じたこと。

自分は、下手っぴで、何もできなかった。でも、ゲームをしていて、値段が上がっていった。B国は、値段が下がっていった。

6．先生の話を聞いて、貿易の不平等や国際社会の抱えている問題は、どのようなことがあると考えましたか。

先進国は、自分の利益のいいように貿易がしてきて、不公平だと思う。
これからこの貿易をなくしていけば、発展途上国は発展していくと思う。そして、先進国はずっとお金持ちの状態だから、今の話の、発展途上国が安いという問題は解決したっても解決しない。そして、先進国と発展途上国との差、遠はどんどんなくしていく。

7．8番の不満や問題を解決するためには、どのようにすればいいと思いますか。

今の世界の状況、発展途上国は現状を先進国が理解することがまず大事。

8．まとめ

まとめ・・・ガーナはもっと豆の輸出量が多いのにチョコレートの国内消費量と輸出量が少ないのは、ガーナはもっと豆の加工した製品の方が豆の生産量が多いけれ、チョコレートが少ない。もっとたくさん輸出しているから、もっと豆の輸出量が多い。ガーナでは、現金ではなくチョコレートを作っても、フランスやイギリスのチョコレートと競争出来ない。だから、チョコレートの輸出量は少ない。また、ガーナは一生懸命作っているチョコレートを食べる人、ガーナの人はチョコレートは高価なもので国内消費量が少ない。

9．カカオ豆貿易ゲーム全体の感想を記入してください。

「1枚のガーナチョコレートが、1時間目では、もっと豆のままでガーナのこと知らないけれど、ビデオからもっと貿易について、ガーナについての色々な事が分かりました。
貿易ゲームでもっと豆の値段が、山の方に豆を買いに行ってチョコレートにしてもらう。だから、ガーナはもっと豆を作り、たくさん輸出し、国内でチョコレートを作ってもらって、他の国から、貿易にはいろいろな利益もあったり出来ました。貿易には発展途上国がまだまだ多くいっぱいいたって、考えることもいっぱいあって、今の話や、世界の現状を考えたりしないといけないなと思いました。何をすべきでしょうか？　次からの授業で、それを見つけて欲しい。

資料　7時限　道徳

5　ガーナに賭けた青春～ガーナ・アチュワ村にて～

3学年道徳資料
「ガーナに賭けた青春　～ガーナ・アチュワ村にて～」

僕の名前は武辺寛則。僕が、青年海外協力隊員として西アフリカのガーナ共和国に着いたのは一九八六年の十二月十五日の夜であった。飛行機のタラップを降りた時、一人の警備員が僕に向かって、まっ白な歯を見せてこう言った。「オー、ウェルカム・トゥー・ガーナ」。その爽やかな笑顔が、僕にはとても印象的で、何となく嬉しくなったガーナ初日の夜であった。

無事、任国内旅行（一度アチュワ村を訪れて、短期間の訓練や研修を行うこと）を終えて首都アクラに戻り、村で生活するための準備をした。正式にアチュワ村に赴任したのは、一九八七年一月二十日だった。僕はこの村に入る3代目の村落開発普及員で、「自給自足的な村内において、現金収入の増大を計るプロジェクトを、村人と共に企画、実行すること。」というものであった。これを達成するために、幾つかの条件を考えた。それは、①、天候の影響をあまり受けないこと。②、村人自身で行えること。③、村の条件に合ったもの。以上の三つであった。

さまざまな調査の結果、僕は「この村では農業を仕事とすることが一番適している。」という結論に達した。まず養鶏に着手することにした。養鶏ならば、老人や子どもでも十分働けるし、商品価値の高い卵を採ることによって、現金収入が得られると思ったからだ。しかし、鶏舎が蟻の大群に襲われ、鶏舎の周りに火を放って鶏を守るなど、日本とは違う自然の持つ脅威を実感したこともあった。

例年なら6月にはもう雨季が始まっているが、この年は特に暑く雨も少なかった。そんな六月のある日、村の男たちが僕の家を訪ねてきた。

「ダケ、お前も知っているように、今年は雨が少ない。三月にまいたコーンは、小さいまま枯れてしまった。」

「キャッサバ（芋の一種）も大半がだめになっているんだ。」

「食料は市場で買ってくるしかないが、そんな十分な金もない。」

村人たちのぼやきは続いた。考えてみれば、現金収入の少ない村人達にとって、毎食のコーンを市場で買うことは、ひじょうに困難なことであった。

この年、干ばつにもかかわらず枯れずに残ったのがファンティーパイナップル（ガーナのファンティー地方で栽培されている、香りや甘みがひじょうに強い独特なパイナップル）だった。当時、この村でパイナップルを栽培している者は、わずかに五名。しかし、この干ばつにも強いという実績を評価して、新しく栽培を希望している者は六五名もいた。まずは、みんなをまとめるためにパイナップル協会を設立した。

さまざまな失敗を繰り返しながら、僕の仕事は少しずつ前進して行った。振り返ると、ここまで僕が手掛けた仕事は、リヤカーの作製、養鶏、パイナップル・ファームなどだが、何一つ他人の手を借りずに出来た仕事はなかった。

ところで、僕がガーナに来て学んだことの一つで、日ごろ教訓としていることに「意志ある所、道は通じる」というのがある。日本のように、何かをしようとしたときに、他人が計画立て（準備をしてくれること）してくれることは、この国では稀である。自分が行動して、目標に達しなければならない。

そんなある日、僕は首長や長老達に呼ばれた。彼らの家に行って話を聞いてみると、「村の中をまとめるナナ・シビ（長老の中の一人）という役職に就いてくれ」とのことだった。「僕は、いずれかは村を離れる人間なので、こんな責任ある仕事は出来ないよ。」と言って断った。これで話は済んだものと思っていたら、一週間後に長老の一人から「ダケ、お前はあと一年以上ガーナにいるんじゃないか。村で話し合った結果、ぜひともナナ・シビへの就任を受けてもらおうということになった。」と言い、村の若者にかつぎだされて、周囲を取り囲まれながら、村の中をねりあるいた。ナナ・シビへの就任式は、一九八八年九月二十四日の収穫祭に行われた。村の中、僕を中心とした行列が一周した後、首長と長老のもとに行き「村の発展のため、今後もがんばります。」と宣誓した。ナナ・シビになってから、他の村人にナナ・シビになったんだってな。おめでとう。」と声をかけられることもあった。恥ずかしくもあり、うれしくもあった。

任期を一年延長した僕には、残り一年の期間がある。二年が過ぎた今思うことは、新しいことを導入したり始めることは比較的容易だが、それを定着させ続けていくことは、とても難しいことだ。アチュワ村に住んで二年、この間に多くの「喜び」「悲しみ」「怒り」を経験し、周りの人々に応援してもらいながらここまできた。そして、今僕はもう一度この言葉を胸において、残り一年を村人と共に頑張るつもりだ。「意志ある所、道は通じる」と。

資料　7時限　道徳

6　ガーナに賭けた青春　ワークシート

ガーナに賭けた青春ワークプリント

組　番　氏名

1. 村人たちが、ナナ・シビ（長老の中の一人）に頼いてもらおうと思うくらい、武辺さんはなぜ、ここまでガーナの人たちのためにボランティアとして働いたのでしょうか。

自分の仕事に責任をもって最後までやり通したかった。また、ガーナの人たちの生活を楽にしたいという気持ちが強くなった。

2. 武辺さんのような国際ボランティアをしたことがありますか。あったらその内容も書いてください。

募金

3. 先生の話を聞いて、他国のために働くことは、どのような価値や意味があると思いましたか。

日本が昔他国からいろいろ教えてもらって豊かになったので、今度は日本が教えてあげて他国に豊かになってもらう番だと思う。どこの国も平等になるためには、助け合っていけばよいと思う。

4. 今後、どのような国際ボランティアに関わっていこうと思いますか。

まずは身近なところにあり、誰にでもできるボランティアをしていくべきだと思います。（募金をする。）また、いろいろな国の状況を知ることも大切だと思います。

資料　8時限

7　ガーナの小学校へ行こう！　ワークシート

ガーナの小学校へ行こう！ワークプリント

組　番　氏名

今日は、ガーナのノエムコミュニティーにある小学校と、アクロポンにあるアマノクロム・プレスビー・プライマリースクール（小学校）を訪問します。

1、ガーナの小学校は、どのような小学校でしたか。自分が卒業した小学校や東中学校と比較してみよう。

ガーナの小学校は、壁がボロボロだったり、なかったり、屋根はトタンであったりと、あまりよい環境ではなかった。また、1つの学年に複数の年齢の生徒がいたり、制服が国内統一だったり、日本とかなり違った。また、ノエムコミュニティーの小学校のグラウンドは雑草がしげっていて、サッカーゴールもめがんでいてネットもなく、日本の学校と比較してかなり環境が悪いと思った。

2. ガーナは日本と同じく「子ども（児童）の権利条約」を批准しています。別紙の「子どもの権利条約」を参考にして、条約で守られていない所を抜き出してみよう。

ガーナでは、小学校を途中でやめたり入らなかったりする子供がいるが、そういうのは国で援助するなりして、通わせなければいけないと思う。また、学校の設備が十分とはいえないので、もっと学校の設備をよいものにしたり、衛生面に気を遣うなりして、子どもの安全なども考えていかなければいけない。

3. 2番のような状況を打開するため、ガーナおよび他の国はどのようなことをすればよいと思いますか。

ガーナにはお金があまりないと思うから、日本などの先進国が積極的にガーナに募金援助や人を派遣したりするべきであると思った。なぜなら、

たくさん他国の援助が入っているから

資料　9時限

8　ガーナでの国際ボランティア活動ワークシート

ガーナでの国際ボランティア活動ワークシート

組　番　氏名

前の時間の話を受けて、今日はガーナにおける外国人のボランティア活動を紹介します。

1. PPAGやSTMの活動について、分かったことや感じたことを記入しましょう。

日本から以お金の援助がしていないと思っていたら、学校建のために教室やノートのことなど、知かいところまで援助もしていたんだなと驚かせられました。普通の生活をしている私が考えられないほどたくさんのものごとが国内にあったと思いましたが、現在もかい援助ができるようにしたいと驚きました。

2. なぜガーナのために、日本人がボランティアとして働かなければならないと思いますか。

国と国とが助け合ったり、少しでもガーナを良い方向へと導くため。ガーナは発展途上国だから、日本ができることを少しでもしてあげることはいい方向ですから。

ここがとても大切なことです。

3. 先生の話を聞いて、国際ボランティアの必要性について分かったことはどのようなことですか。

お金とかそういう物質的なものでなくて、人と人とが触れ合って現地の状況を知り、その国自体や人自体を良い方向へと導いていくことが必要だと思います。どんな価値のものを送ってもその使い方がわからなければ役に立たないから、山本さんの自分の手助けはとても必要だと思いました。がんばって！

4. 今後、自分がどのような国際ボランティア活動にどのように関わって行こうと思いますか。

青年海外協力隊の一員として、ボランティアしたいのが一番いいのだけれど、ボランティア募金をして、まず身近なことから関わり、もし機会があればやってみたいと思っています。将来青年海外協力隊員になれればと思います。

参加動機およびプロフィール

工学部土木系の学科を卒業後、通信教育により中学校社会科の教員免許を取得しました。1998年から個人レベルで国際理解教育を実践しています。現在は国際理解教育を通して、道徳的実践力を高めることと、環境教育に取り組んでいます。

『ガーナでは、なぜチョコレートをあまり作っていないのか？』生徒たちにとっては、知識を覆す『解決の必然性』のある学習課題になったと思います。また『カカオ豆貿易ゲーム』を通して、ガーナの抱える課題を疑似体験し、先進国日本のパートナーシップのあり方を考えられたと確信しています。

学校教育で国際理解・開発教育を実践するときには、何の時間を活用するかが問題になります。特別活動には特別活動の、いわゆる総合には総合の目的があります。つまり国際理解・開発教育も、その活用する授業時間の目的を達成するようなカリキュラム案が必要です。今後もこの事を自問自答しながら、教材開発と実践に取り組んで行きたいと思います。

開発途上国の現状を理解し、解決のためにできることを考える

～メディア（新聞）の報道をきっかけに取り組んだ成果をWEBで発信する～

末武久人 SUETAKE HISATO
社会科
長岡市立青葉台中学校（新潟県）

実践教科　社会科
時 間 数　8時間
対象学年　3年生
対象人数　28人

カリキュラム案

実践の目的

1学期の学習では、かつての被援助国の日本がユニセフの援助を受けていたこと、また、それをふまえて国際協力の重要性と日本の果たすべき役割について学んだ。さらに国際協力の仕事としてユニセフ以外に何があるのかも考えた。JICA（国際協力機構）やJOCV（青年海外協力隊）、NGO（非政府組織、民間公益団体）等様々な組織や活動そのものについて調べ、ある程度理解も深まったと思われる。

しかし、これらの組織や活動が根本的に何を解決しようとしているのか、また組織相互の関連性などについては時間的な制約もあり充分に理解するまでには至らなかった。そこで、問題発生の根源にあるものは19世紀以降のヨーロッパを中心とした帝国主義政策によって生じた南北問題であると考え、問題発生の関連図を作成することを通して解決に向けて自分たちには何が出来るかを考えた。

開発途上国ガーナで見たこと、聞いたこと、体験したことをビデオやWEBサイトで教材化することで、生徒は臨場感をもって学習に参加し、南北問題をより深く理解できるものと考えた。このような学習を通して、南北問題を解決するためにはただ必要なものを援助するだけではなく、その国の自助努力を促すような視点での援助が必要であることを考えることを目的とした。この目的を達成するため、具体的な学習目標として次の4点を掲げた。

(1) 歴史的分野とのかかわりから南北問題が発生した理由を確認し、解決に向けて様々な組織や活動が複雑に関わっている事を統括的に理解する。
(2) その国の経済的な自立を支援するために、どの方向からどのように支援していけば良いのかを明確にし、自分たちにできることを考える。
(3) ガーナ共和国の人々の暮らしや環境を理解する。
(4) 様々な方面でガーナの自助努力を支援するために活動しているJICA職員や青年海外協力隊員、地元NGOのスタッフの生き方に共感する。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
第1時限 ガーナに対するレディネス調査	・新聞記事を読み生徒の開発途上国やガーナに対するイメージを調査する。	・新聞記事(新潟日報)(資料1)
第2時限 南北問題・ガーナについて調べよう	・基本的事項を提示し、各自で調べ学習を行なう。	・インターネット ・図書館資料

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
3時限 調べたことを総合して南北問題・ガーナを理解しよう	・2時限目で調べた事柄同士の関わりを関連図をつくり表現する。 ・ビデオを見て感じたこと、解ったことをまとめる。	・自作ビデオ（GHANA） ・2時限目の調査内容（各自）
5時限 南北問題や派生する諸問題に対して出来ることを考えてみよう	・3時限目で作った各自の関連図と、関連図例を見比べ、関連のわからない部分を明確にする。 ・問題を解決するためには、関連図のどこに何をすればよいかを考え明確化する。	・3時限目で扱った関連図例（資料2）
8時限 南北問題の重要性、自分達との関連性を理解する ・講師の話と発表を聞き、感じたこと、個人の考えの変化をHPの掲示板で発表する。	①これまでの学習を振り返る。ガーナ人の講師（アウニ氏）を迎え紹介を聞く。 ②南北問題の解決に向けての代表者の提案発表。 （生徒の発表にアウニ氏と教師の解説を交え、図書資料から見えない部分を補った。 →自分の提案を見直したり、南北問題を解決しようとする意欲を一層醸成する。）	・ワークシート ・ガーナの木工品（JOCVの技術支援により生産したもの）
	③ワークシートにまとめた内容をHP掲示板で自由閲覧することで意見交換を重ね、それぞれの思考を深める。 ④アウニ氏の話を聞き、感想をワークシートにまとめる。	・ホームページ ・ワークシート

4、6、7時限目の授業については掲載を省略させていただきます。

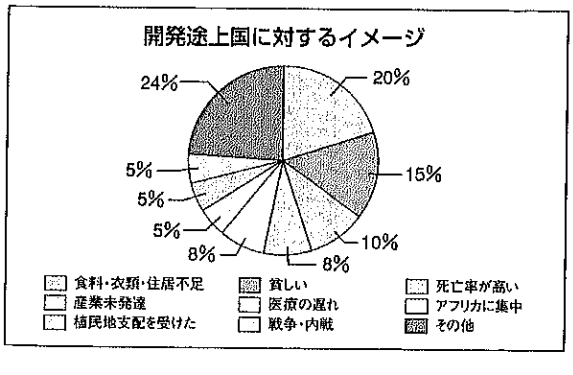
授業の詳細

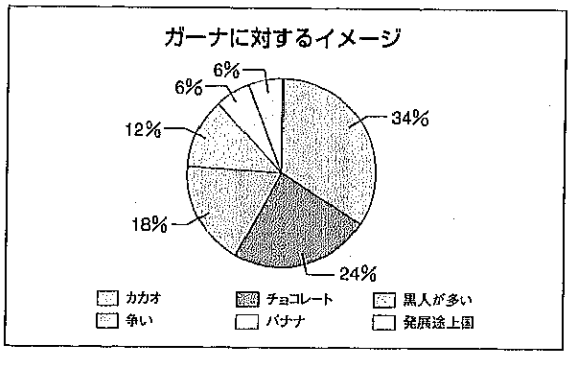
1時限

ガーナについてのレディネス調査

新潟日報に『人口爆発どう歯止め』と題して、東京に本部を置くNGOの家族計画国際協力財団（ジョイセフ）が現地のガーナ家族計画協会（PPAG）やガーナ保健省と協力し、助産者の資格をもたない人々への研修を実施したり、またHIVを予防し、感染者への差別を解消するために取り組んでいる保健ボランティアの活動を紹介した記事が掲載された（資料1）。この記事をもとに、開発途上国やガーナに対するイメージ、記事を読んで感じたことなどについて調査した。

予想されたことではあるが、ガーナの位置を正確に答えられたのは全生徒の11%に過ぎず、しかもガーナに対するイメージもカカオやチョコレートといった単純な内容が大半を占めた。開発途上国に対するイメージや新聞記事から読み取れることについて





「人口爆発どう歯止め」（新潟日報7月5日（土））を読んで

わかったこと		わからなかったこと		感じたこと		知りたいこと	
乳幼児死亡率が日本の４９倍	7	HIVに感染するとどうなるか	5	結婚・出産する年令が低い	4	HIVをどのようにして解決するか	6
ガーナでは結核菌の耐性が進んでいるため出産は危険である	5	アフリカでHIV感染率が高い理由	3	紙芝居でうったえることはよい	4	人口爆発への対策	3
HIV感染者が多い	3	人口爆発への対策	1	HIV解消のため多くの力が必要だ	4	他の国の対応	2
人口が増えている	3	助産者が出産に立ち会えない理由	1	どこの国でもHIVへの差別がある	3	ワイズダム・アソシエーション，ジョイセフについて	2
日本のNGOが活躍	3	妊産婦死亡率が高いのに人口爆発が起きること	1	HIV感染者を差別せず国全体で取り組むべきだ	2	日本の取り組み	2
アフリカ諸国の中ではHIV感染率が低い	2	差別の解消のため紙芝居の効果は	1	助産者が出産に立ち会えるよう結婚に取り組むべき	2	紙芝居『終わらないサヨナラ』の内容	1
HIVは貧国からの脱出を困難にする	2	多い割合のHIVに感染すると経済問題の障害になること	1	出産が多いがHIVの感染の危険性も多いこと	1	男性の意識	1
望まない出産が多い	2	他のアフリカ諸国の現状	1	出産と引き換えに母親が死亡するのは悲しい	1		
HIV感染者への差別が多い	1			途上国には問題点が多い	1		
HIV感染者を村をあげて支援している	1			結婚した１０代の母親に職業訓練を	1		
避妊実行率が低い	1			日本のNGOの研修は良い	1		
				一人っ子政策が必要	1		

は、歴史的分野での学習や１学期の学習で学んだこともあり、ある程度既習の内容と関連づけて考えをまとめた生徒も多かった。

2時限

南北問題・ガーナについて調べよう

http://www.kome100.ne.jp/aobadai-jhs/environment/index.htm

インターネットや図書館の資料等から基本的事項を確認し、わかったことを自分の言葉でまとめた。特に新しい内容を中心に調べ、机間指導をしながら発問を繰り返し、理解の程度を確認した。例示したもの以外の内容でも必要と感じた基本的な事項をあげるよう指示したが、例示した事項を確認するだけで精一杯で、放課後又は自宅で課題に取り組む生徒も多かった。

〈基本的事項として例示した内容〉

①単元全体

南北問題、南南問題、帝国主義、奴隷貿易、国連貿易開発会議（UNCTAD）、人口爆発、乳幼児死亡率、HIV罹患率、モノカルチャー経済、GDP（国内総生産）、ODA（政府開発援助）、NGO（非政府組織）、JICA（国際協力機構）、JOCV（青年海外協力隊）、温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、砂漠化、熱帯林の減少、生物種の絶滅、国連人間環境会議、国連環境開発会議（地球サミット）、気候変動枠組み条約、京都議定書、自然エネルギー

②ガーナ（日本との比較も含む）

気候、民族、宗教、人口増加率、乳幼児死亡率、HIV罹患率、GDP（国内総生産）、輸出品、アナン国連事務総長

自作サイトも調査に活用した。

3時限

調べたことを総合して南北問題・ガーナを理解しよう

前時で確認し、調べた基本的事項がどのようにかかわりあっているのかを考え、全体の関連図を表現した（資料2）。関連図を作成している間、教師は生徒一人一人の声を聞き、わかりやすく説明を繰り返すなど個に応じた支援を繰り返した（まとめ方の例も示したが、基本的事項の関連性を理解できない生徒と表現方法を理解できない生徒が併せて1/3程度あった）。関連性を理解できない生徒については時間の確保が必要であり、表現方法を理解できない生徒については教師の提示の仕方をもっと工夫すべきだと思われた。

また、自作ビデオ（GHANA）を視聴し、感じたことや解ったことをまとめた。

6時限

南北問題や派生する諸問題に対してできることを考えてみよう

関連図例を提示し、自分ではなかなか考えることができない生徒の参考とした（資料2）。自らの関連図を考えるうえで参考になったこと、また関連図例でわからなかったことを朱で書いた。生徒たちはこの指導で基本的な事項がどのように関わっているのかについてじっくりと考える機会を得た。作成されたプリントの記述から思考を練り上げることができた生徒が多かったことがうかがわれた。

さらに自ら考えた関連図の中で、どこを解決したらよいかを明確にして自分たちができることを提案した。「私たちができることは限られている」「募金をすればよい」というような提案が多い中で、ガーナの自助努力を支援するような提案がいくつか見られた。自分で全体的な関連図を描き、視点を明確にして提案するということで、ただ金品を援助すればよいといった類の単純な考えから、より思考が深まったものと思われる。このことは生徒一人一人と話しながらその表情から感じとることができた。

8時限

南北問題の重要性、自分達との関連性を理解する

前時までに南北問題の解決に向けて自分たちで出来ることについて具体的な提案が行われた。その中から自助努力を促す提案を行った生徒を選び、提案の内容について詳細に発表してもらった。その他の生徒は、どんなことを感じたか、発表を聞いて自分の考えが変わったところはないか、さらには他にも補足できるような内容はないかといった視点で考えた。そして各自の考えを、自作サイトの掲示板に書き込んで公開した。掲示板を使うメリットは生徒が気軽に参加できることである。また、すべての生徒の意見をリアルタイムで集約したいと考えこの方策を採ることにした。ただし、ネットを使用する上での匿名性から来る無責任な発言等を防ぎたいという考えから、氏名を記述させ、さらに建設的な意見を書かせることで発言には責任をもつという意識も醸成したいと考えた。また、講師のオーガスティン・アウニ氏（長岡造形大学英語講師　ガーナプアルグ村教育支援基金事務局）から発表者の発言や掲示板の書き込みに対してアドバイスをもらい、南北問題を解決するためにはどうしたらよいかについて考えを広げ、深めた。

本時の学習目標

- 南北問題が国際社会の中で重要なことを再確認し、解決に向けて自分たちでも出来ることから努力しなければならないことを理解する。
- 発表者の提案や支援者のアドバイスを聞いて、感じたことや考えが変わったことについてその内容を自作サイトの掲示板を活用して表現する。

1. これまでの学習を振り返る。講師（アウニ氏）を迎えて紹介を聞く。

2. 南北問題の解決に向けた代表者の提案発表。

代表者1『私の提案は「NGO参加して環境問題を解決しよう！」です。私は主にインターネットで情報を集めて考えをまとめました。OISCAというNGOが「子どもの森計画」というワークキャンプを行なっています。これは現地の人と生活を共にし井戸掘りをしたり、子ども達と一緒に学校の敷地や隣接地で苗木を育てることで地球の緑化を推進しようとするものです。「子どもの森計画」に参加して苗木を育てると子ども達に文房具が支給されるため教育環境も向上すると考えられます。子ども達の教育環境を整え、さらに地球環境にも良い影響を与えるため、このようなNGOの活動に参加することは私達にもできるかもしれないと考え提案し

代表者による発表の様子

ました。』

代表者2『私の提案は「自立支援のためにフェアトレードをすすめよう！」です。南北問題を解決するためには、開発途上国の人々が正当な賃金を得て自立して生活していけるように、継続的に安定した取引（貿易）を支援することが必要です。フェアトレードの長所としては、開発途上国の製品（手工業品）を直に輸入するため、手作りの温かさを感じその国の文化や伝統に触れることができることや、自立できるよう長期間継続して行なわなければならないため、自然環境や文化を壊さないように行なえることです。また、売る人と買う人という対等の関係ができあがることなどがあげられます。特に、支援の方法の代表としてあげられる資金援助はよいことですが、あげる人もらう人という上下関係が生じるため、継続させることは困難です。また、援助を打ち切られたら元に戻ってしまうということも考えられます。フェアトレードは、商品の取引を通して前に述べたように、対等の関係を築くことができます。そして、開発途上国の人は生活が向上するとともに自立することができるのです。わたしたちがフェアトレードの商品を購入することは、開発途上国の人々の支援に直結するのでとても簡単にできる国際協力の方法の一つだと考えました。』

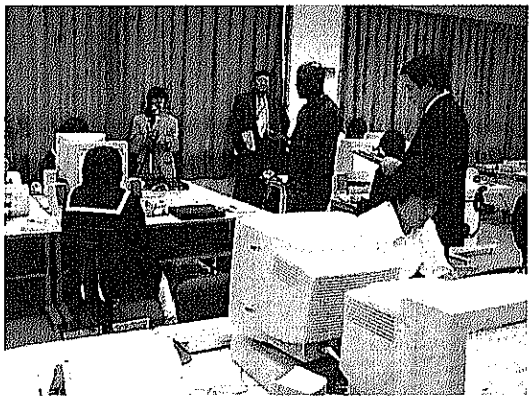
ここで1時限で取り上げた新潟日報の新聞記事「人口爆発どう歯止め」を想起させた。

またフェアトレードの例としてNGOと共同して青年海外協力隊員が現地で技術支援として生産している木工品を紹介した。それから、アウニ氏に「直接の援助」について話をしていただいた。

アウニ氏『日本では現在コーヒー一杯の値段はいくらですか。現地では4円です。貿易の不均衡の結果です。貿易会社が中間の搾取をしているのです。また必要以上の収奪をしているのです。途上国の人々は自分たちの力で生きていきたいと考えています。ガーナ人はカカオは食べたことがありません。買うお金が無いからです。直接現地の人から買ってください。

現地の人はODAよりもフェアトレードを望んでいるのです。ODAは、豊かな国の貧しい人から税を取りたてて、途上国の豊かな人にばら撒いているというマイナス面もあるんですよ。政府を通すと現地まで十分な支援はいかないのです。

国と国というよりも人間と人間で交流すべきなのです。国を超えて直接交流することが必要です。赤い羽根の募金の81％は働いている人の給料になります。政府の手を通さずに直接支援してください。ガーナの学校もそうして作りました。日本人から支援してもらった資金で2年以内でガーナでも有数の学校ができました。直接の援助が最も効果があるのです。同情はいりません。直接の援助をお願いします。』


アウニ氏のお話を聞く

このあと、自分たちが考えたこと、感じたことをワークシートにまとめた。

▩生徒の様子および考察

生徒は木工品の現物を見て手に触れたことでフェアトレードに対してかなり興味を持った様子があったが、単に品物を買えばいいと判断した生徒もいたので、商社を仲介せずに適正な価格で購入するということをいかにして理解させるかということが課題として残された。そのためには、教師が提示する前に、木工品やビーズの値段を生徒に想像させたり、ガーナのGDPや物価、平均年収などを考慮しながら適正な価格を考えていくような学習過程も必要と感じた。さらに発表者の提案に感化され、自分たちの努力も必要なことは多くの生徒が感じていたようであるが、生徒自身の提案と比較させることはほとんどできなかった。やはり他と比較して自らの提案の質を高めるようにするためには、テーマを一つに絞り込む必要があると感じた。

3. 自作サイトの掲示板に感じたことやアドバイスを書き込む。

ワークシートにまとめた内容を全員が共有し合い意見交換を重ねながら、それぞれの思考を深めることが出来るよう掲示板に書きこんだ。

最初の書きこみはアウニ氏への質問だったが、意見交換のきっかけとして取り上げた。

生徒1『日本人が忘れかけている心ってなんですか。』

アウニ氏『たくさんありますね。例えば物を大切にする心。感謝する心かな。物が豊かになるにつれてそれが当たり前のようになり、物を大切にせず感謝の気持ちも忘れてしまったのではないですか？』

生徒1『そう思います。』

続いて生徒2の書き込みを取り上げた。

生徒2『植林はどのようなことに役立ちますか？』

代表者1『まず、植林活動のメリットは、森林の違法伐採等の環境破壊に対する解決策となります。また、子ども達が植林するので環境に対する意識が育つという教育効果もあります。あと詳しいことはまだ調べている最中です。』

生徒の様子および考察

生徒1さんに対しては、アウニ氏の意見に安易に同調してしまったため、例えば「あなたもアウニさんの言うとおりですか？違う部分もあるんじゃない？」などといった追加質問を加えればさらに自己を見つめる機会を提供できたのかもしれない。質問に対しては発表者の記述や、その記述を読んだ生徒からの返信があり、意見交換を繰り返す中で思考の深まりが感じられた。一方では、自分の提案と比較したり、考えが変化したような記述に付いては書き込みは少なかった。

4. 掲示板を読んだアウニ氏のコメントを聞き本時の学習をふり返る。

『同情なんかいらない。直接援助してくださいという言葉が心に残りました。将来ガーナに行って援助したい』という書き込みを紹介し、アウニさんにコメントを求めた。

アウニ氏『日本の子どたちをたくさんガーナに連れて行きたいです。自分の国から離れないと自分の国の良さもわかりません。日本を離れてみると日本の良さがわかります。是非外国の生活を体験してみたほうが良いです。携帯電話も自販機もありません。ジャスコもないですよ。そういう世界に住んでみると人間も環境もわかるものです。この中にガーナに行きたい人はいますか（4～5人挙手）。末武先生とは日本を離れた飛行機の中で偶然あったんですよ。日本を離れてその良さを確かめてみてください。』

生徒の様子および考察

生徒はアウニ氏の話を聞いて大きく頷き、感じたことをワークシートに真剣にまとめていた。以下はその記述の一例である。

○ガーナについて調べたり、ビデオを見たりして今まで遠い存在だったガーナがとても身近に感じることができた授業でした。

○ガーナのアウニさんからお話を実際に聞くことができてとてもいい授業だったと思う。やっぱり現地の人からお話を聞くことができたというのはインターネットや新聞で見たりするより影響力がはるかに大きかった。

○このようなテーマでの授業は多いけれど、今回の授業ように時間をかけて順を追ってのやり方は自分自身にとってよいものだったと思います。自分できちんと考えてみるのはいい勉強になりました。

○みんなからせっかく集めたお金が無駄になってしまっては意味が無く、直接の協力をしていかなければならないことを知った。

○日本人は毎日の生活が当たり前すぎて、大切なことを忘れていたんだなあと思った。

○「人間と人間」、この関係がまず一番大事であることを知りました。

○やはりインターネットやニュースではわからないこと、募金がどのように現地に行くのか、現地でどのように使われるのかをただ募金するだけでなく調べることが大事だと感じた。

○政府を通してだと支援する国の中でも豊かな人達にしか支援されないだなんて驚きました。国と国でなく人と人との間で国際協力をこれからしていくべき。

○ODAの現状があまり好ましくないということがわかった。一人の人間としてこの問題に取り組むことが大切だということがわかった。

成果と課題

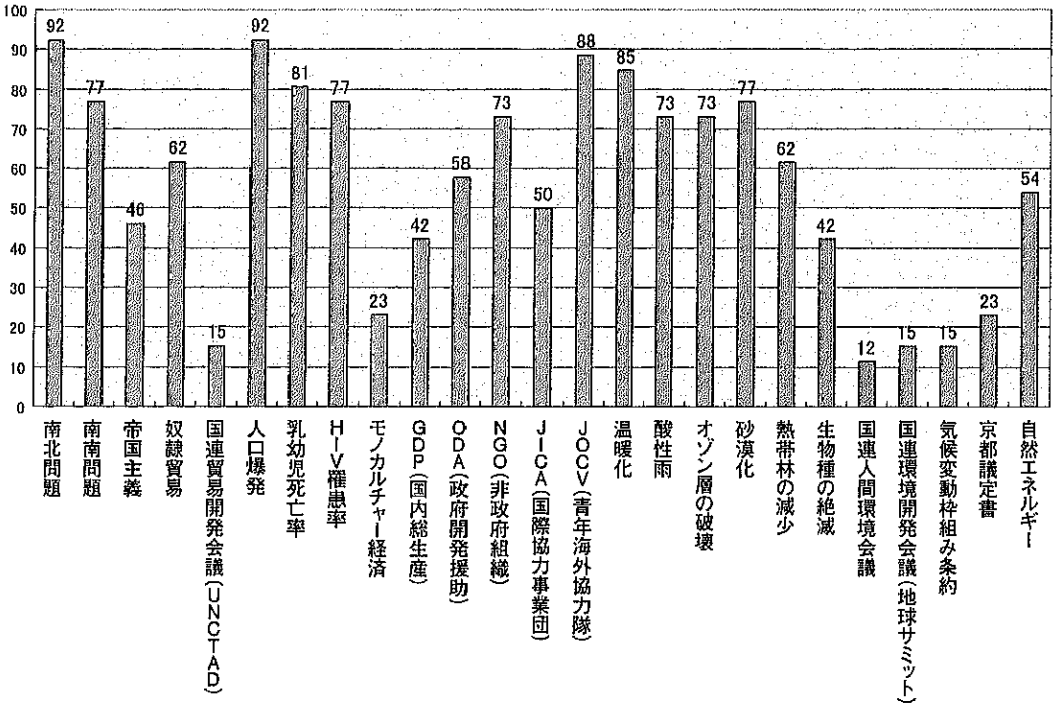
ここでは8時限の学習目標を達成できたかどうかという視点を中心に述べる。

成果

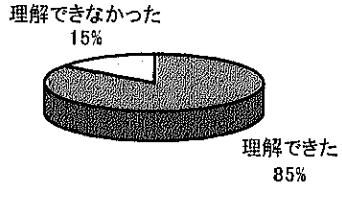
はじめに、社会的事象への関心や意欲の観点から、南北問題の重要性を再確認し、解決するために生徒自身も努力しなければならないことを理解できたかどうかについて考察する。感じたことやわかったこと、アドバイスなどをまとめたワークシートの記述からは、開発途上国の現状を改善するために努力することが必要であり、その内容もそんなに難しいことではないと理解した生徒が多いことが伺われた。特に政府や関連の組織を使って支援を行なうよりも、フェアトレードを実践した方がより有効であることに気がついたという記述が多く目に付いた。

次に、社会的な思考・判断の観点から、発表者やアウニさんの話しを聞いて感じたことや考えが変わったことを掲示板に書き込んでいるかどうかについてであるが、先ず約93%の生徒が自らの考えを書き込んでいることが掲示板のログからわかった。普段はなかなか発言をしない生徒でも、掲示板という場を設定したことで、比較的簡単に自己表現ができた

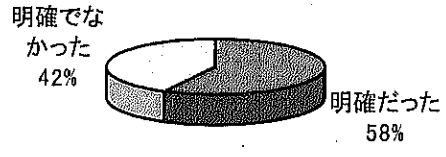
理解できた基本的事項



南北問題発生の関連図が理解できたか？



南北問題解決の支援の視点が明確だったか？



様子である。その記述の内容については、発表に対する一般的感想は少なく、具体的な社会的事象をあげて、理解したことや思考の変化をまとめたものが目立ち、さらに自らの生き方を見直すような記述もいくつか見られた。

課題

2時限で例示した基本的事項についての理解度、南北問題発生の関連図の理解度および南北問題解決の支援の視点が明確であったかの3点について、アンケートを用いて調べた結果を前ページのグラフに示した。

基本的事項についての理解度は、国連貿易開発会議、モノカルチャー経済、国連人間環境会議などの6項目において30%以下の回答であった。このことは、いくら生徒主体の調べる学習を行なったとしても、教師が必ずどこかで補充をしなければならないことを示すものである。理解度が低かった基本的事項については、必ず定着するよう支援する場を今後設定していくつもりである。

基本的事項の関連図が理解できたかという問いに対しては85%の生徒が理解できたとは答えているものの、どうしていいかわからず、教師が提示した内容を何とか理解できたという程度の生徒も多かったようである。思考力を高めるためには、ただ関連を考えてみようという指示ではなく、ステップを踏みながら関連図が構成できるような段階的な支援を考えていかなければならないと感じた。

南北問題解決のための支援の視点が明確であったかという問いに対しては、明確でなかったと答えた生徒が42%と意外と多かった。この理由としては、生徒レベルでできることを考えようという制約があったために視点を定めることが難しかったことが考えられる。

資料　1時限

1　「人口爆発どう歯止め」新潟日報　2003年7月5日朝刊　共同通信配信

21　特別　上中　2003年(平成15年)7月5日(土曜日)　(朝)　新潟日報

人口爆発どう歯止め

日本のNGO　ガーナで取り組み

助産活動の知識指導

保健ボランティア育成も

安全なお産

地元の協会

10代の母に職業訓練

妊娠での退学に活路

エイズ対策

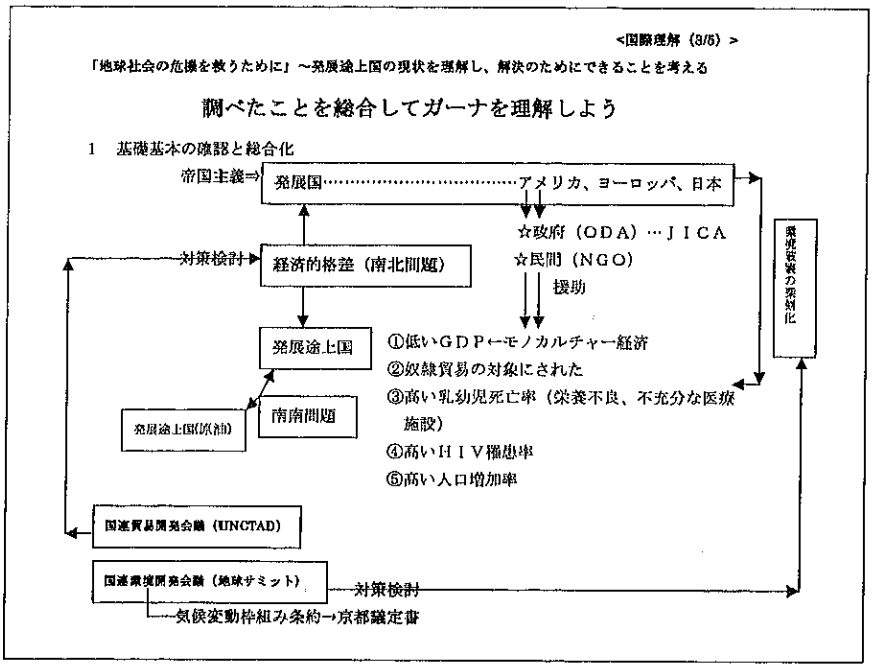
差別解消へ

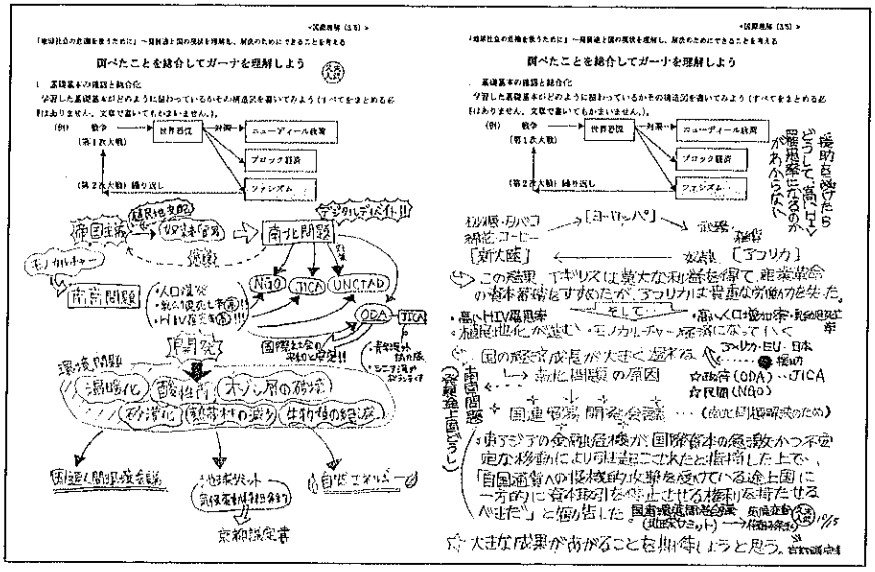
紙芝居活用

資料

5時限

基本的事項の関連図





参加動機およびプロフィール

これまでの実践としては、エネルギー問題、特に原子力発電について新聞を活用した取り組みを行いました。WEBを立ち上げたことで様々な視点からいろいろな意見を国内外からいただきました。現在、身近な地域の調査活動を通して、世界の環境問題を考える取り組みを実践中です。トータルで環境問題を調査させ、海外の実践校と共同研究も行うことで、徐々に焦点化しようという実践です。WEBも一部完成していますが、開発途上国の環境問題や有害廃棄物の越境移動という視点から南北問題を考察させたいと考えています。
本実践を通して、生徒一人一人が南北問題をグローバルに把握し、解決に向けて自分なりに行動できるようになったことは大きな成果です。今後は環境問題の観点から南北問題の解決に迫りたいと考えています。

多様な文化と変容する東南アジア
～社会事象や資料を多面的に考察する力を育てるには、どのように指導したらよいか～

竹田眞人 TAKEDA MASATO
社会科
更埴市立屋代中学校（長野県）

実践教科　社会科　地理
時 間 数　9時間
対象学年　2年生
対象人数　36人

カリキュラム案

素材の教材化

（1）素材の選定

素材の選定にあたっては、①共感できる、②多様な価値を持つ、③多面性がはっきりしているものを選ぶ必要がある。

①については、風景や統計という無機的なものではなく、より人間的なもの、または人間に結びつくものであり、また、「遠い国の話＝自分とは関係ない話」にならないように、日本が関係するものが考えられる。

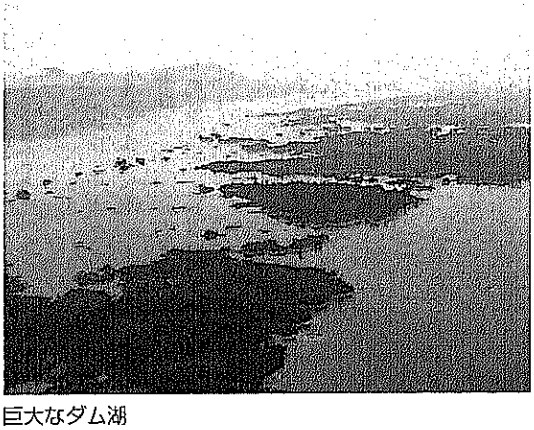
②、③については、できるだけ単純化できることが大切である。例えば「いい面と悪い面」というような価値判断を行いやすい側面をあわせもった資料が考えられる。

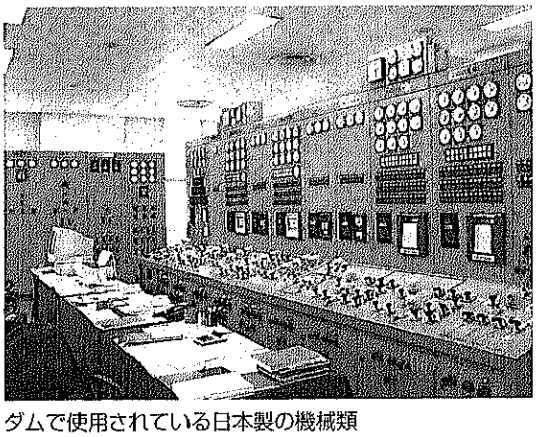
このような考えに基づき、以下のような素材を教材として選定した。

【ナムグムダム】

〈概要〉

ナムグムダムは、発電用のダムとして世界12カ国の資金援助によって作られた。日本は４分の１を資金援助した。ナムグムダム開発は、1959年に日本人によって計画され、1967年から、アメリカ、日本をはじめとする９カ国の援助資金を世界銀行が管理するかたちで工事が開始された。３期の工事が行われ、1985年工事が終了した。総工事費用は、９千万US$。また、その後、1996年にはナムソン川の水を、2000年にはナムルック川の水を転流する工事が完成した。このダム計画は、設備の設計、製作、施行、技術者の育成までほとんどが日本企業によって実施され、現在使用されている機械類、コンピュータも日本のものである。


巨大なダム湖


ダムで使用されている日本製の機械類

ナムグム発電所で発電される電気は、国内供給されている一方で外貨獲得のために輸出されている。1980年代中頃には、電力による外貨収入はラオスの外貨獲得総額の6割を占めていたが、現在は国内需要増大や他の輸出品の増加等により、外貨獲得額の6％程度となっている。

ダムによってせき止められた水は、370平方キロメートル（琵琶湖の半分、貯水率世界第2位）という巨大なダム湖を出現させた。東京都の面積が616平方キロメートルであるので、東京都の半分以上が水没したことになる。

〈問題点〉

ラオスでは、今後も50とも80とも言われるダム計画が予定されている。日本の本州ほどの面積しかないラオスで、これだけのダムを作るというのは、環境面からも、将来のダムの必要性の面からもラオス国民に与える影響は大きい。

ナムソン川、ナムルック川の水をナムグム湖に転流するようになると、乾季にこれらの川の水が不足し、下流の住民の生活に困難が生じるなどの問題が既に起こっている。また、雨季に放水し、洪水が起こるなどの問題も起きているが、これらの問題が、このダムのせいかどうかはわからないという人もいる。

【パキンさん】

タイ、チェンマイ市出身。将来ツアーガイドになることを目指し、千曲市に語学留学中。月曜日から水曜日までは屋代中学校を訪ね、英語の授業や給食など生徒とともに過ごしている。

パキンさんは、日本に対して好印象を持っており、「日本人は親切で、とても一生懸命働くところがいいところ」だという。日本の援助に対しては「ありがたい」と言っている。その反面、「日本の工場が進出し技術を提供してもらえるのはいいことだが、日本の製品は高価でほとんどの人が買うことができないし、便利になることはいいことだと思うけど、日本のように忙しい生活になるのは嫌だ。東南アジアらしい“Slow Life”を守っていきたい」と言っている。

実践の目的

全9時限のうち、1～6時限までは日本との関係から東南アジアを見つめる。統計資料を正確に読みとり様々な国の特徴を事実として客観的にとらえることを目的とした。

そして第7時限を本単元「多様な文化と変容する東南アジア」とし、「ナムグムダム」「パキンさん」の2つの教材を使った実践をした（従って授業の詳細は本単元のみを取り上げる）。

本単元では、わが国日本と東南アジアの人々の生活や考え方の違いを知り、それぞれの国のよさを尊重しながら自分と結びつけてよりよく理解しようとする態度、環境や人々の生活をより多面的に考えていこうとする態度を養うことを目的とした。

8～9時限は、東南アジアと日本とのよりよい関係のあり方を考え、東南アジアや日本に対する自分の見方・考え方をとらえ直すことを目的とした。

本実践でつけるべき力（評価のポイント）

①学習問題に対し、既習事項や複数の資料と結びつけながら主体的に追究し、自分なりの考えをもつことができる。（「社会的な思考・判断」）

②資料や他の考えをもとに、自分の考えを見つめ返しながら、東南アジアを自分なりにとらえ直すことができる。（「資料活用の技能・表現」「知識・理解」）

③社会事象をとらえ直すことで、今までの自分と違う見方・考え方ができるようになった自分を感じることで、自ら学ぶ意欲を高めることができる。（「社会事象への関心・意欲・態度」）

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限 東南アジアを知ろう	・「東南アジア」にはどんな国があるだろうか？ ・「東南アジア」のイメージは？ ・「東南アジア」にはどんな国があるのか色分けして白地図にかきこむ。	・東南アジア白地図 ・地図帳
2・3時限 東南アジアってどんなところ？	「プランテーション」って何だろう。歴史的背景を学ぼう。 ・イギリスの植民地 ・大規模な農園 ・資源と製品の輸出入 ・複合民族国家 ・モノカルチャーへの移行による不安定な経済 マレーシアの歴史的背景を学んで、どんなイメージを持ったか考える	・油ヤシ（プランテーション写真） ・マレーシアの国旗
4時限 これからの東南アジア 東南アジアはこの「モノカルチャー」のままでいいのかⅠ	・前時までのふり返りで東南アジアは「かわいそう」「貧しい」イメージが多かったが、それはなぜだろうか？ ・前時に学習したことを統計から見直してみる。 モノカルチャーというが、どの位天然ゴムや油ヤシを作っているのか。統計資料をみてみる。 「ほとんど東南アジアで作っている。」	
5時限 工業化する東南アジア 東南アジアはこの「モノカルチャー」のままでいいのかⅡ	・東南アジアは、モノカルチャーから脱却するためにどうしたらよいのかを考え発表する。 ・「工業化する」「技術を外国から教えてもらう」という2つの視点に着目する。 ・あなたが日本の代表だったら、技術を教えますか？（学習カードに理由も含めて書きこむ） ・今の東南アジアの産業の様子を統計から見てみる。 ・東南アジアの産業に日本は、どのくらい協力しているかに着目する。	・統計資料 ・賃金比較 ・百円ショップ商品の生産国
6時限 日本と東南アジア 日本からの協力の仕方は本当に良いものだったのだろうかⅠ	・これまでの協力が良かったのかを統計を見て考える。 ・「日本の技術協力への賛否のグラフ」を提示し、相反する2つの意見があることに着目する。 ・協力は良いことかを考える	・日本の工場進出 ・アジアへのJICA技術協力、写真資料 ・日本の技術協力への賛否のグラフ
7時限(本単元) 多様な文化と変容する東南アジア 日本からの協力の仕方は本当に良いものだったのだろうかⅡ	・学習問題を確認し、それについて話し合う。 ・日本の技術協力の資料映像とパキンさんの話を聞いて、自分の考えを見つめ直す。 ・話し合いを振り返り、自分なりの考えをまとめる。	・資料映像(ナムグムダム)
8・9時限 日本と東南アジア 日本と東南アジアはこれからどういう関係を築いていけばよいか？	これまでの授業を振り返って、社会事象は必ず2つ以上の側面を持っているという目で、資料を見なければいけないことを学ぶ。	・生き生きと生活する東南アジアの人々の様子（写真資料）

授業の詳細

※授業の詳細については単元学習「多様な文化と変容する東南アジア」の部分のみの掲載としました。

7時限

多様な文化と変容する東南アジア

日本の協力ために東南アジアの人々の様々な考え方や生活の状況が変化してしまった事実を知ったり、日本の援助に対する東南アジアの人の話を直接聞いたりすることを通して、日本と東南アジアの人々の生活や考え方の違いに気づき、自分の考えを見つめ直し、日本と東南アジアが共存していくためにはどのような関係をつくっていけばよいのか自分なりに考えることを本単元の主眼とした。

なお、評価のポイントは以下の2点とした。

①資料を基に自分なりの考えを書いたり、発言したりできる（社会的な思考・判断）。

②他の考えと自分の考えを重ねながら資料を捉え直すことができる（資料活用の技能・表現）。

展開

学習内容	教師の発問・生徒の反応
1 学習問題を確認し、それについて話し合う。	今のみんなの考えとその理由を発表してください。 「モノカルチャーになってしまって、困っている東南アジアに技術協力をしてきたのだし、日本にとっても安い賃金で製品が作れたのだから、いいと思う。」 「東南アジアは資源がたくさんあるから、日本が技術協力して工業が発展したからいいことだと思う。」 「いいことばかりだったのに、何で反対の人がいるのだろう。」 「天然ゴムなどを作らなくなったら、資源がなくなってしまうから反対の人がいるんじゃないかな。」
2 日本の技術協力の資料映像（ナムグムダム：ラオス）とパキンさんのお話を聞いて、自分の考えを見つめ返す。	他の資料でも同じようなことがいえるのだろうか？ ○日本の協力によって作られたダムによって、ラオスに住む人々が多大な恩恵を得ていることが分かる資料を見せる。 「日本の協力のおかげで電気がついたり、TVが見られたり、やっぱり良かったんだ。」 「やっぱり、日本の協力の仕方はよかったと思う。」 同じダムのもうひとつの資料を見てみよう。 ○日本の協力によって作られたダムによって、ラオスの人々の中に被害を受けている人もいることが分かる資料を見せる。 「ダムができて、一部には電気がいくようになって便利になったけど、自分の家が湖に沈んでしまったのはかわいそうだ。」 「日本の技術協力は良くなかったのかな、協力しなければモノカルチャーのままだし、どうやって協力すればよかったのか分からなくなった。」 「もしかしたら、今まで見てきた協力でも、被害にあっている人たちがいたのかもしれない。日本の協力の仕方は良くなかったのかもしれないな。」 協力が良くなかったのだろうか、このダムの協力だけが良くなかったのだろうか？ ○東南アジアの人は日本の協力をどう思っているのかパキンさんの考えを聞く ※パキンさんの話は「素材の教材化」参照 「日本の技術援助をありがたいと思っている反面、のんびりした生活がよくて協力はそれをくずすことでもあるといっていたから、協力したことがよかったのか分からなくなったな。」

学習内容	教師の発問・生徒の反応
3 話し合いを振り返り、自分なりの考えをまとめる。	本時の発問に対する今の考え方と、これからどういう協力、関係を気づいていけばよいか考え、学習カードに書こう。 生徒の反応（学習カードから） ・東南アジアには東南アジアの良さがあると思った。 ・ナムグムダムでは村を追い出された人々にも、しっかり援助をすべきだと思った。先のことまで考えて援助をしていかなければいけないと思った。 ・日本は東南アジアの国と、どんな協力をしていけばいいのか、話したりしていき、東南アジアの国々が自立していけるようになればいいと思う。 ・JICAやODAの協力は大切だけど、そのせいで困っている人もいて、協力といっても難しいなぁ、と思った。 ・東南アジアの人々は、日本の協力で電気が通ったり、生活が良くなったりした人と、日本の協力によって家がなくなってしまった人もいて、同じ国でもこんなにも違うことにびっくりした。協力って難しいなぁ。 ・パキンさんの話を聞いて、お互いに話を聞いたりしなければ分からないことがたくさんありそうだなと思った。

成果と課題

これまでの学習とは違い、生の資料に触れることによって、生徒は自分の身に近づけて考えることはできたようである。しかし、社会科の授業としてよりは、国際理解教育の授業に近い授業になってしまったことが反省される。また、同じアジアの仲間としてこれからどう共存していくか、というところまでは深まらなかった点も反省される。

このことから、「共存のありかたを考える、捉え直す」というようなねらいで授業を行うならば、社会科ではなく、国際理解教育の授業とすべきだと考えられる。社会科のねらう、生徒につけたい力としては、合致しない点が多いからである。しかし、社会科としては、生の教材にふれることから学習を深めていくことは大切な過程であり、ラオスでの研修をどう生かしていくか、今後も研究を続けていきたい。

参加動機およびプロフィール

中学校社会科の教師は、授業で様々な国々のことを教えなければなりません。これらの国々の中で、生徒がもっとも興味を示すのは、教師が生の素材を示すことができたり、話ができたりする国についてです。私自身が中学生の時の社会科の先生は、多くの国に旅行に行っていたり、日本人学校の経験があったりする先生でした。その先生が話す世界の国の話をいつも楽しみにしていました。いつしか自分も世界の国々に出かけていきたい、世界にはどんな国々があり、人々がいるのだろう、と興味を持つようになりました。社会科の教師になったのも、その先生方の影響からでした。私が数少ない海外での経験から話をする時、生徒が関心を示すのは、自分たちと同じ年頃の子どもが何を考え、何をしているのか、ということでした。また、経済の不安定さから日本や自分の将来に不安を感じ、国際社会にあっての日本のはたす役割を非常に軽いものだと感じ、母国への誇りを持てない生徒が多い中、生徒には母国に誇りを持った上で、国際協調の心を身につけてほしいと願い、地理の東南アジアを学ぶ学習で、多面的に考えることができるよう授業を組み立て、国際協力については、生徒それぞれの考えが持てるように構成しました。

世界に目を向けて
～パネルディスカッションをしよう～

林　美千代 HAYASHI MICHIYO
国語
高岡市立戸出中学校（富山県）

実践教科　国語、学校祭、生徒会活動
時 間 数　12時間（単元学習4時間）
対象学年　2年生　　全校生徒
対象人数　124人（4クラス）380人（13クラス）

カリキュラム案

実践の目的

「本当の学びとは、生きるとは」を改めて考えさせてくれた途上国訪問。その現状を、ありのままに目の前の生徒に伝えたい。生徒が自分たちの国を客観的に見つめ、広い視野を養い、地球市民として平和で明るい未来のために行動する日本人になってほしいという願いを込めて、「世界に目を向けて」という単元学習を設定した。

この4時間の単元学習では、国際理解と国際協力に関するテーマについての小グループの話し合い活動、書く活動、全体で討議する活動を通して、教科の目指す「立場を明確にして論理的に話す、聞く力」「根拠を明らかにして書く力」をつけることを目的とした。

光村図書中学2年国語教科書の「国境なき医師団」の活動を綴った文章と「モアイは語る―地球の未来―」の文章は、国際協力および地球の未来という視点で、私たちのあり方を考えるには良い教材である。今回の研修体験がこの教材に系統的につながる指導になるように工夫し、「世界に目を向けて」の一連の学習を構成した。

一方、学校行事としての学校祭（文化祭）で、生徒会が「戸中ハートフルコミュニケーション」のスローガンのもと、国際理解と国際協力を取り上げて、テーマ室を制作した。内容は、地球の仲間たちを検索できるPCコーナーの設置、国際理解を深めるためのユニセフのパネルやポスターの展示、ユニセフ募金、「ラオスに絵本を送ろう」運動等誰でも参加できる国際協力体験を展開することを意図した。

学校祭後、2年生を中心として発足した後期生徒会は、学校祭をきっかけに、身近に誰でも参加できる国際協力の推進に主体的に取り組んでいる。

授業の構成

■学校祭―生徒会の活動―

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
戸中ハートフルコミュニケーション テーマ室「世界の子どもたちは今」 ・開発途上国で生きる子どもたちの生活や考え方に関心を持つ。 ・国際協力に関心を持たせ、参加への第一歩を体験する。	【知る、調べる、体験する】 ・学校祭で、国際理解のための生徒会テーマ室を設置する。次の六つの視点からコーナーを制作。 ①「世界の子どもたちの生活や考え方」を知ろうパソコンコーナー 「地球の仲間たち」のCD-ROMを活用し、パソコンで世界の子どものようすを調べる。 ②ユニセフを知る展示コーナー ユニセフポスターの展示から世界の子どもたちの現状を知る。 ③ビデオ上映 ユニセフビデオ「働く子どもたち」他二本の上映 ④ラオスフォトグラフィー ラオスの衣食住、教育、医療等を紹介 ⑤「ラオスに絵本を送ろう」コーナー 家で眠っている絵本の収集　（資料1） ラオス語の訳の添付作業体験 ⑥ユニセフ募金 花鉢を売り利益をユニセフに送る。	・地球の仲間たち「フォトランゲージCD-ROM版」 ・パソコン6台 ・ユニセフパネル10枚、ポスター30枚 ・ユニセフビデオ「働く子どもたち」「世界子ども白書」 ・民族衣装、教科書　海外研修写真 ・NGO「ラオスのこども」提供絵本の翻訳シール ・花鉢（地元農家より購入）

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
世界に目を向けてⅠ		
1～5時限 「伝え合い」・「マドゥーの地で」 ・世界の国々に目を向け、考えてみたい課題や、自分との関わりを考える。	【読む】 ・異文化、異言語の国で、意志の疎通の困難さを述べた文章を読み、コミュニケーションについて考える。 ・日本人として初めて「国境なき医師団」に参加した医師の、ボランテイア体験を読み、生き方を考える。	・光村図書国語2年教科書 「伝え合い」（西江雅之） 「マドゥーの地で」（貫戸朋子）
6～8時限 「モアイは語る―地球の未来―」 ・読書により、視野を広げる。 （地球の視点で私たちのあり方を考える。）	【読む】 ・森林消滅と人口増加により飢餓地獄に陥ったイースター島を教訓に、地球の未来を考えるという文章を読み、地球の未来を考える。	・光村図書国語2年教科書 「モアイは語る」（安田喜憲）
単元学習　世界に目を向けてⅡ―パネルディスカッションをしよう―		
9時限 「無人島で100日間生き延びよう」 ・開発途上国の生活状況を認識する。 〔立場を明確にして論理的に話す、聞く〕	【グループで話し合う】 ・無人島で生きる上で必要な最低限のものについてグループで話し合い発表する。 ・生きるために最低限必要なものは何かを話し合い、開発途上国の生活ぶりを考える。 ・生きるために最も大切な水、生徒に身近な学校という視点を中心に、世界の開発途上国の安全な水供給率、就学率、識字率の全体数を資料から把握する。	・「水、トイレがなかったら」（資料2） 「世界の国別就学率」（ユニセフ統計資料より）（資料3）

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
第10時限 世界の子どもたちは今―ラオスの青春― ・ビデオ教材を通して、開発途上国について理解を深める。 ・主な国際協力活動の現状を知る。	【全体で発表する、共有する】 ・前時の水と就学率の資料から、わかったことを発表する。 ・ユニセフの「地球の仲間たち」のビデオをみて、開発途上国の現状について理解を深める。 ・自作のラオスの小、中、高校生の生活や考え方を収録したビデオで見て、ラオスの若者の現実や願いを共有する。 ・国際協力を行っている組織とその主な活動を知る。 ・今日の授業で、心に残ったこと、日本との違い等をメモし、意見文の材料とする。	・「地球の仲間たち」（ユニセフビデオ） ・ラオス海外研修撮影ビデオ ・JICAパンフレット ・「ユニセフってなあに」学校向けパンフレット
第11時限 地球の今―世界に目を向けて―の学習をもとに、意見文を書こう ・国際協力について、自分の意見を持たせ、意見文で表現する。 ・パネルディスカッションのテーマと方法を知り、準備をする。 〔根拠を明らかにして書く力をつける〕	【意見を持つ、意見を書く】 ・「世界に目を向けて」を学習して考えさせられたことについて、意見文を書く。600字～800字程度で、心に残ったことや日本との違い、考えさせられたことや考えていくべきこと等を書く。 【パネルディスカッションの準備】 ・パネルディスカッションの役割分担。（司会・書記・パネリスト・フロア）	
第12時限 「世界に目を向けて」―わたしたちにできることは―についてのパネルディスカッション ・国際協力について考えを深める 〔根拠を明確にして、論理的に話す聞くことができるようにする。〕	【パネルディスカッション】 ・テーマに沿ってパネルディスカッションをする。意見文の中から、違う視点の考えのものを数名パネリストにたてる。 ①テーマの確認 ②パネリスト意見発表（一人2分程度） ③フロアーの質疑応答と全体討議 ④司会者による方向付けと整理 ⑤パネリストによるまとめ ⑥司会者によるまとめ	ラオス海外研修の自作写真30枚程（衣食住、医療、教育の視点より紹介したものを雰囲気作りに活用） ・司会、書記、パネリストの名札
最後 生徒会活動による国際協力活動の展開 3年次の5月の修学旅行のテーマ別コース学習で、国際交流コースを企画	【国際協力の実践をする】 ・学校祭「絵本を送ろう運動」の継続収集した絵本46冊に、ラオス語の翻訳を1ページずつ貼る。（生徒会執行部、代議員会、ボランティアで） ・郵便局からラオスへ船便で発送する。 ・書き損じハガキの収集 ・ユニセフ募金の送金	・資料4 ・資料5

授業の詳細

※授業の詳細については単元学習「世界に目を向けてⅡ―パネルディスカッションをしよう―」の部分のみの掲載としました。

第9時限

「無人島で100日間生き延びよう」

前時までの「モアイは語る」―地球の未来―を学習したあと、発展学習として、「世界に目を向けてⅡ」の単元学習を試みた。『地球の未来は、地球の今の延長線上にある。では、世界の今はどうなのか、視野を広げ、よりよい未来のために行動しよう』というねらいである。まず、「100日間、無人島で生き延びるには」という課題についてグループで話し合いをして、無人島で生きるために必要なもの10点を選ぶ。

次に全体の発表と質疑応答をする。さらに、生きるために絶対必要なものを５点に絞り、理由を付けて発表した。

10点の中には、以下に示すように水が入っていない班もあった。

無人島で生きるため必要なもの１０点（A班の例）

1	チャッカマン	6	懐中電灯
2	サバイバルナイフ	7	ロープ
3	食糧	8	テント
4	しゃぶしゃぶ鍋	9	無線機
5	救急セット	10	方位磁針

（この班は水が入っていない。）

続いて、生きていく上でもっとも大切なものである水を視点にして、開発途上国の安全な水の供給状況を資料から読みとった。（資料２）

また、生徒に身近な学校を視点に、世界で学校へ行けない子どもについて就学率のデータ資料から開発途上国の状況を読みとった。（資料３）

10時限

世界の子どもたちは今 ―ラオスの青春―

前時の資料２「水とトイレがなかったら」、資料３「識字率と就学率」から、わかったことを発表した。世界の国には、安全な水が手に入らない国が東アジアとアフリカに多いことや、学校へ全員が行ける国は世界で約190カ国余のうち17カ国しかないこと等、資料からたくさんの発見をしていた。

次に、実際の開発途上国の子ども達の生活のようすをビデオ「地球の仲間たち」で視聴した。さらに、ラオス研修で取材した、貧しさのため中学を中退して機織りで自立を目指す少女と、自分で働いて学費を稼ぎ、学業と両立している17歳の高校生の青年の生活ぶりと夢を収録したビデオを、自分たちの生活と比べながら視聴した。

開発途上国の子ども達の生活の現実を追体験したあと、国際協力活動を推進しているユニセフ、ODA、JICA、NGOなどの組織とその主な活動を簡単に紹介した。

生徒は、「自分と同じ年で働いて学校へ行けないとは。」「蛇口をひねると当たり前に出てくる水なのに、世界には水をくむのに１時間も坂道を歩いて毎日運んでいる子どもたちがいるとは驚いた。」など、さまざまな発見や疑問を抱き、発表していた。本時のまとめに、今日の授業で心に残ったこと、日本との違いやわかったことをノートにメモした。

11時限

地球の今 ―世界に目を向けて― の学習をもとに意見文を書く

前時のメモを材料に、「世界に目を向けて」というテーマで意見文を書いた。内容は、今まで学習したことで、心に残ったこと、考えさせられたこと、考えていくべきこととした（字数は600字以上）。これは、次時のパネルディスカッションに生かすことを意図したものである。

12時限

パネルディスカッション

前時に書いた意見文をもとに、パネルデイスカッションを行った。司会と書記は全体で１名ずつ、パネリストは各グループから１名を意見文を読んで選出、他はフロアとした。テーマは「世界に目を向けて―わたしたちにできることは何か」とした。本来、パネリストは、違う視点の考えのものを３～４名たてるところだが、今回は、意見を持ち明確に伝えるという経験を積ませるために、４人班７グループから１名ずつ代表が出て、７名が一人２分程度で意見を述べた。討議は次の順で進めた。

〈ディスカッションの手順〉

① テーマの確認
② パネリストの意見発表（一人2分程度）
③ フロアー側も参加した質疑応答と全体討議
④ 司会者による話題、論点の整理
⑤ パネリストによるまとめ（一人1分以内）
⑥ 司会者による全体のまとめ

質疑応答では「貧しい国とはどこか、ラオスの他に具体的に言ってください。」「自覚するだけで、国際協力の意味はあるといえるのか。」「安全な水がな

い国には私たちは何ができますか。」などの質問が多様に出された。パネリスト側からは、「コンビニで募金をする。」という一面的な回答をするものもいたが、「ユニセフに募金するだけでよいのか。東京の水などは開発途上国と別の意味で汚い。日本は、自然と共存して発展することが、開発途上国の手本となることにつながると思う。」など教師の予想以上の発言も出され、討議が深まり大変おもしろいディスカッションとなった学級が多かった。あまり発言がない1学級は、生徒自身が国際協力の体験が少ないことと、積極的に発言する雰囲気にやや乏しいことが原因であると思われた。その場合、臨機応変に、教師が、フロアまたはパネラーの一員となり討議に参加して、海外研修で自分の目で見てきた国際協力支援活動、出会った青年海外協力隊員、専門家のことなどを紹介し、話し合いを深めるようにした。授業全体を通して生徒の視野は広がり、国際協力への関心と意欲は喚起できたように学習状況から実感している。

パネリストの意見例

・「…略…僕たちは、ユニセフに募金するだけで本当にいいのだろうか。…中略…ユニセフは「貧困」から解放してくれる。あくまで生きるための「最低限」のことをしてくれる。…略…僕は今の開発途上国の人たちのためにできることがあると思う。それは、今の環境を汚染し続けている状態から、いち早く抜け出し、「自然と共存」することができたならば、開発途上国の人の「手本」となり、後々に、少しは役立つことができる。そのためにも、まずは身の回りから無駄な消費を抑えて暮らしたい。略」

パネルディスカッションの国語授業

・「今日、国際化社会というこれからの地球を生きていく上で大切なキーワードを考えてみる。少しは知っていたが、改めて考えさせられたことが大きく三つあった。一つは、国を良くして子ども達を救うのはユニセフをはじめとする国際ボランティア団体ではなく、その国の国民であるということである。その国の文化、しきたり、事情に一番詳しいのは、その国の人々にほかならない。国際ボランティア団体は、国を良くする、子ども達を救うという決意にきっかけを作る存在であるということを改めて考えたい。

二つ目に、児童労働についてである。国という組織はあっても、経済状態が悪ければ国民の生活も豊かにならない。…中略…三つ目に現代日本人の行動についてだ。「おまえもモップがけやれよ。」といっても拒否する人がいる。友人間の思いやりも出来ないのに世界の子どもたちのことを考えることができるのであろうか。これは日本が子どもの個性を尊重しすぎたからであると思う。…中略…僕たちが自分で世界を見て、正しい情報を知り、自分の意見を持ち、自分の出来ることに気づいたとき、行動していかなければいけない。」

・「私は、このビデオを見て大変衝撃を受けました。…中略…私は学校へ通えることを感謝しなければならないと思います。今度からは、募金するときは『子ども達が助かる』そんなわくわくした気持ちをもって協力したいと思います。」

フロア側の意見例（質問例は前述したので省略）

・「わたしは、貧しい国の人たちへの考え方が変わりました、今までは、『かわいそうだなー』ぐらいだったけど、今は、何か自分たちにできることは精一杯しなくてはいけないんだな、と思いました。」

・「わたしは、安全な飲み水を飲める人の方が少ないということに、一番驚きました。私たちは、水道の蛇口をひねるだけで、簡単に水を飲むことができます。飲むだけでなく、水は、生きていく上で必要不可欠なものです。そんな水を遠い川から運ぶのが子どもの一番の仕事だなんてびっくりしました。その仕事が原因で学校に行けない子どもたちがたくさんいることにも驚きました。」

「世界に目を向けて」の学習をしての感想より

・「世界に目を向けて」を学習して、わたしは、開発途上国の人々のことや、国際ボランティアの知識も以前に比べて増えました。特に印象に残ったのは、パネルディスカッションです。このような討議は、はじめて

だったので、どんな感じになるか検討もつきませんでした。自分と同じ考えの人や、違うけどいいなと思った意見もあり、クラスの人の意見が聞けてよかったです。みんながこんなに真剣に世界の子どもたちのことについて考えることができてよかったと思いました。やはり、みんなに共通することは、感謝の気持ちを忘れないことと自分たちにもできることをしていきたいということです。私ももっと開発途上国のことを知って、できることから始めていきたいです。

・この勉強をするまでは、社会以外に世界を勉強するなんてことがあまりなかったから、とてもいい機会だった。社会では、世界の今の状態は習わないから、今この学習をして少し世界が広がったと思う。…中略…パネルディスカッションでは、自分は意見がいえなかった。やっぱり、恥ずかしいという気持ちがあるからだと思う。でも、パネリストのひとの意見を聞いて、「へえー」と思ったことがいくつもあった。また、機会があったらパネルデスカッションをして、今度は意見を言いたい。

成果と課題

体験にまさる素晴らしい教材はないであろう。本単元学習は、自分が開発途上国へ実際に行った体験から考えさせられたことや感動をもとに、自分として新鮮な授業をすることができた。

本単元学習「世界に目を向けてⅡ」において、無人島ゲームを国語の話し合い活動に生かしたことは、課題の魅力から、どの生徒も大変意欲的で、効果的であった。大変ユニークな発想も出てきて、楽しく活発な話し合い活動ができた。

今回、実際に開発途上国の状況を見て、国際社会の抱える問題を中学生なりに考え、文章に書き、討議する学習活動は、国語科という教科はもちろん、教科を超えて、日本を外から眺める貴重な学習であったと考えている。またパネルディスカッションを通して、国際協力への理解を深め、豊かな日本の一員として、自分たちができることを考えたことは、実践への意欲にもつながった。

学校祭での「世界の子どもたちは今」という取り組みでは「絵本を送ろう」運動の結果46冊の絵本に翻訳を貼りラオスに11月末に船便で発送した。この原稿を書き終えようとしている今、お礼状と絵本を読むこどもたちの写真が送られてきた（資料5）。国際協力に役だった喜びを実感した日本の中学生とラオスのこどもの草の根交流が、始まろうとしている。

さらに、3年次の修学旅行でのテーマ別コース学習にも、国際交流を取り入れていくことになった。

国際理解に関する学習課題は、多彩な教材が準備できることがわかったので、ユニセフやJICA等の資料を活用して、国際理解教育ことに開発教育を推進していきたいと考えている。

しかし、時間の確保が課題である。必修教科のなかでは位置づけが難しい。総合的な学習の時間で取り組むには、発達段階を踏まえた3年間の見通しと全校職員の共通理解も必要である。

他、課題はあるが、今後も、自分自身が国際社会の問題に関心を持ち、行動する日本人になること、そして、次世代を担う生徒たちが国際社会に通用する日本人に育つように生きた授業の工夫をしていきたい。

【授業で使った資料・教材の入手先】

・「地球の仲間たち」
開発教育を考える会（巻末資料参照）
・ビデオ「働く子どもたち」「世界子ども白書」、ユニセフパネル、ユニセフポスター
日本ユニセフ協会（ユニセフ視聴覚ライブラリー）http://www.unicef.or.jp/siryo/sicho.htm
・JICAパンフレット
JICA各国内機関（巻末資料参照）

資料1

＝学校祭のテーマ＝

生徒会テーマ虹作り

戸中ハートフルコミュニケーション

YOUR LOVE SAVES THE WORLD

（あなたの愛が世界を救う）

あなたの手で、アジアの子供達に

絵本を送ろう運動

今、世界中の人々が手を取り合ってチャリティーを通じて、アジアの子供たちに絵本を送ろうという運動があります。この運動は、世界の人々が一人一人の愛を絵本に託して、アジアの子供たちに送ろうという運動です。

リストカードを集める日：10月6日(月)～7日(火)

提出先：学級代表（学級代表は2年4組高桑に提出して下さい）

絵本を持ってくる日：10月11日(土)（学校祭前日）
10月12日(日)（学校祭当日）の2日間

集めた絵本は、翻訳シールを貼り、アジアの子供達に船便で届ける予定です。

リストカード

ナンバー No.＿＿＿　署名＿＿＿＿＿＿

作者＿＿＿＿＿　出版社＿＿＿＿＿＿

翻訳シールを自分で貼りたいですか？（はい・いいえ）
（外国語の訳）　年　組

学校祭「ラオスに絵本を送ろう」
国際協力体験コーナー

資料2

資料B

水とトイレがなかったら…

今日、一度も水を使わなかった人はいないでしょう？　水道やトイレ…、わたしたちはこうしたものをどのようにして手に入れてきたのでしょうか。

世界中のすべての人が安全な飲み水や衛生的なトイレを使うことができるわけではありません。安全な水がないために命をおびやかされている子どもたちさえいます。わたしたちはどのように水を使い、そして世界にはどのような問題があるのか、考えてみましょう。

トイレのない生活を想像してみよう。いろんな問題がおこってきそうだね。トイレは、わたしたちの健康を考えてもなくてはならない、ふかい関係があるんだ。だけど、屋内のトイレを使える人は、世界の人口の半分にすぎないんだよ。

11億人が安全な飲み水を手に入れられない

中東／北アフリカ	4%
CEECIS	4%
ウクライナ／ベラルーシ／旧ユーゴ	4%
南アジア	15%
サハラ以南のアフリカ	25%
東アジア／太平洋諸国	42%

貧しい国では状況が悪化している

後発開発途上国では、普及率が低下している　(%)

TRY

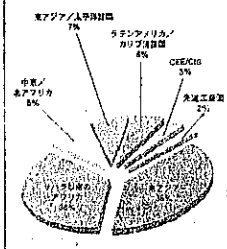
ユニセフは、すべての人が安全な水を手に入れられるようにさまざまな活動をしているわけだ。それぞれの国や地域によって安全な水を手に入れる方法はちがっている。次の例を参考に、それぞれの国では、安全な水を保存するためにどんな方法を考えたらよいだろうか。アイディアをひねってみよう。

こんな国では	安全な水を保存するためにどんな方法が考えられるかな？（自分の考えを書こう）
雨の少ない国	
家畜の多い国	
森林の多い国	
川のない国	
工業国	

資料 3

学校に通えない子どもが多い地域

小学校就学年齢で、学校に通っていない子どもの割合（1999年）



1999年時点で、小学校に通うべき年齢にありながら学校に通えない子どもは1億2,000万人いました。内訳は53%が女の子、47%が男の子です。1990年よりも男女格差は縮まっています。

出典：ユネスコ（2000年）

出典：ユネスコ、ユニセフ（2000年）

子どもの就学率・出席率*（1999年）

サハラ以南のアフリカ	
セーシェル※	100
スワジランド	100
カボベルデ	99
モーリシャス	97
ジンバブエ/ブリンシパ	91
赤道ギニア	89
南アフリカ	87
ウガンダ	85
ナミビア	86
ジンバブエ	85
ボツワナ	81
ガボン	83
マラウイ	81
ガーナ	71
タンザニア	74
カメルーン	73
トーゴ	69
ザンビア	67
モウリタニア	66
レソト	65
ソマリア	64
バニン	62
コモロ	60
地域平均	60
コンゴ民主共和国	59
コートジボワール	47
マダガスカル	51
ナイジェリア	56
モーリタニア	54
タンザニア	53
ガンビア	53
アンゴラ	50
セネガル	49
ブルンジ	47
エチオピア	41
モザンビーク	41
中央アフリカ	43
ギニアビサウ	42
シエラレオネ	41
マリ	40
チャド	39
ギニア	37
エリトリア	37
ニジェール	37
リベリア	31
ブルキナファソ	27
中東／北アフリカ	
シリア	99
レバノン	98
アラブ首長国連邦	96
アルジェリア	97
バーレーン	97
イラン	97
キプロス	96
リビア	96
オムン	95
パレスチナ暫定自治区	94
クウェート	94
チュニジア	94
イラク	93
オマーン	93
ジブチ	87
エジプト	86
地域平均	81
サウジアラビア	76
モロッコ	76
イエメン	55
スーダン	49
ヨルダン	47
西アジア	
モルディブ	96
スリランカ	90
パンジャブシュ	82
インド	76
地域平均	75
ネパール	66
ブータン	51
パキスタン	46
アフガニスタン	21
東アジア／太平洋諸国	
ニウエ	100
ツバル	100
中国	99
マレーシア	99
ベトナム	99
インドネシア	93
サモア	93
シンガポール	93
ブルネイ	91
モンゴル	90
フィリピン	90
パスアツ	90
タイ	90
キリバス	71
ラオス	69
ミクロネシア	68
カンボジア	63
CEE/CIS	
カザフスタン	100
モルドバ	99
ブルガリア	98
グルジア	98
ハンガリー	97
キルギスタン	97
ポーランド	97
ユーゴスラビア	97
ルーマニア	96
ボスニア・ヘルツェゴビナ	96
クロアチア	96
ボスニア・ヘルツェゴビナ	94
ウクライナ	93
ロシア	91
タジキスタン	91
チェコ	91
アルバニア	90
アゼルバイジャン	85
エストニア	87
地域平均	87
ベラルーシ	85
トルクメニスタン	80
ウズベキスタン	78
トルコ	77
ラテンアメリカ／カリブ海諸国	
バルバドス	100
バハマ	99
アンティグアバーブーダ	98
アルゼンチン	98
メキシコ	97
アルゼンチン	96
ブラジル	96
ガイアナ	96
キューバ	94
トリニダード・トバゴ	94
ジャマイカ	93
ウルグアイ	91
ベリーズ	91
コスタリカ	91
パナマ	91
地域平均	91
コロンビア	90
エクアドル	90
チリ	89
ドミニカ	89
セントクリストファー・ネビス	89
スリナム	89
トリニダード・トバゴ	83
ボリビア	83
パラグアイ	83
ホンジュラス	82
パラグアイ	81
セントビンセント・グレナディーン	84
パラグアイ	79
エルサルバドル	80
エルサルバドル	73
グアテマラ	77
ハイチ	47
先進工業国	
フランス	100
アイルランド	100
イタリア	100
日本	100
ノルウェー	100
ドイツ	100
ニュージーランド	100
ノルウェー	100
ポルトガル	100
スペイン	100
スウェーデン	100
デンマーク	99
フィンランド	99
アイスランド	98
英国	98
ベルギー	97
スイス	96
地域平均	96
オーストリア	96
オランダ	95
スロバキア	95
米国	95
オーストリア	91
ギリシャ	90
ドイツ	88
東欧平均	82
開発途上国平均	80

1999年のデータがない国：
サハラ以南のアフリカ：コンゴ
東アジア／太平洋諸国：朝鮮民主主義人民共和国、東ティモール、マーシャル諸島、ミクロネシア、パラウ、パプアニューギニア、ソロモン諸島
CEE/CIS：アルバニア、リトアニア、スロバキア、ウクライナ
ラテンアメリカ／カリブ海諸国：セントルシア
先進工業国：アンドラ、バチカン、イスラエル、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、モナコ、サンマリノ

*この指標は、各国の教育省当局が提供した学校就学データと、小学校就学年齢のパネルデータ（国際連合）、それにより学校就学年齢の子どもに学校に通っているかどうかを実際に上全国家調査に基づいています。

出典：ユネスコ（2000年）

資料 4

資料D

Let's save children

～ 居眠りはがきで、ラオス・タイの子たちを救おう ～

H11.1月28日
生徒会 執行部

みなさん、今年も、友達から、たくさんの、年賀状が届きましたか？ 今年も、生徒会では、居眠りはがきの収集を行いたいと思います。みなさんの力で、1人でも多くの人を救いましょう。

収集の対象となるもの

- 配達済でも消印が押されなかった年賀はがき
- 宛先名・文面をまちがえて、投函されていないはがき
- 切手の貼っていない私製はがき

中央棟2F廊下、生徒会掲示板前の（アイディ）Boxまで持ってきてください。期間は 1月29日 ～ 2月6日 までみなさんご協力よろしくお願いします。

集まったはがき、250枚で、なんと、3ども1人の1年間分の、授業料になります。
はがきを通して、幸せを運び、世界の国と仲良くなれるチャンスです。
みなさん、協力してね！

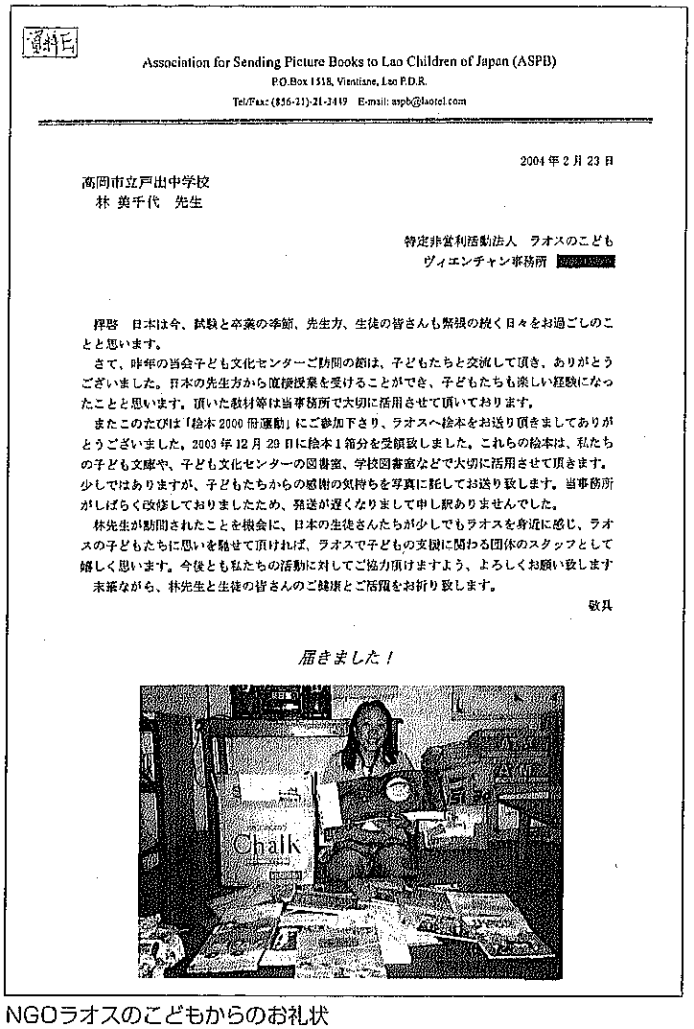
資料

5 事後の活動

写真①　「絵本を送ろう運動」のラオス語翻訳貼作業

写真②　郵便局より46冊の絵本を船便で発送

写真③　届いた絵本を読むラオスの子ども



資料5

Association for Sending Picture Books to Lao Children of Japan (ASPB)
P.O.Box 1518, Vientiane, Lao P.D.R.
Tel/Fax: (856-21)-21-2449　E-mail: aspb@laotel.com

2004年2月23日

高岡市立戸出中学校
林 美千代　先生

特定非営利活動法人　ラオスのこども
ヴィエンチャン事務所

拝啓　日本は今、試験と卒業の季節、先生方、生徒の皆さんも緊張の続く日々をお過ごしのことと思います。

さて、昨年の当会子ども文化センターご訪問の節は、子どもたちと交流して頂き、ありがとうございました。日本の先生方から直接授業を受けることができ、子どもたちも楽しい経験になったことと思います。頂いた教材等は当事務所で大切に活用させて頂いております。

またこのたびは「絵本2000冊運動」にご参加下さり、ラオスへ絵本をお送り頂きましてありがとうございました。2003年12月29日に絵本1箱分を受領致しました。これらの絵本は、私たちの子ども文庫や、子ども文化センターの図書室、学校図書室などで大切に活用させて頂きます。少しではありますが、子どもたちからの感謝の気持ちを写真に託してお送り致します。当事務所がしばらく改修しておりましたため、発送が遅くなりまして申し訳ありませんでした。

林先生が訪問されたことを機会に、日本の生徒さんたちが少しでもラオスを身近に感じ、ラオスの子どもたちに思いを馳せて頂ければ、ラオスで子どもの支援に関わる団体のスタッフとして嬉しく思います。今後とも私たちの活動に対してご協力頂けますよう、よろしくお願い致します

末筆ながら、林先生と生徒の皆さんのご健康とご活躍をお祈り致します。

敬具

届きました！

NGOラオスのこどもからのお礼状

参加動機およびプロフィール

10年前JICAの方が、1つの飴を分け合うガーナの子の話をしてくださいました。その時、当たり前の豊かさの中で、忘れた心を思い出すことができました。様々な状況で生きる世界の子どもたち、生きることの厳しさを自分の目で見て、自分の言葉で目の前の生徒に伝えたい。三児の母また国語教師として、気付けば四半世紀が過ぎていました。今度は自らが視野を広め、確かな経験から得た大切なことを教材として、思春期の豊かな感性に問いかけたい、そう考えています。

研修後、楽しみながら自作の単元学習を構成しました。貴重な体験は授業へのエネルギーとなりました。地球村の視点で行動する日本人を育むべく、日々の授業や生徒会などで私達が出来ることを伝えていきたいと考えます。

Take actions!

～知り、考え、行動するための教育活動をめざして～

八木三鶴 YAGI MITSURU
英語科
亀岡市立詳徳中学校（京都府）

実践教科　総合学習・道徳・英語・生徒会活動
時 間 数　20時間
対象学年　3年生
対象人数　約100名（生徒会活動については全校生徒）

カリキュラム案

実践の目的

①海外で働き現地の人々と共に生きる日本人達の「生き方」に学ぶ

今回の研修で、ラオスの人々が自立をしていくために多くの日本人の方々が、現地の人々と共に働き、活動をしている姿を目の当たりにした。教育、保健衛生、農林水産、機械、スポーツ等、各分野の方々からどのような支援が行われているのかを実際に見たり、話を聞くなかで、その「行動力」や「生き方」から学ぶ。

②自国の文化への認識

経済開発を支援する一方で、ラオス織り、草木染め等の技術指導を通して、国や地域の文化を保存し、育むという援助の姿にも学ぶものがあった。授業を通して、日本の文化に学び、日本の文化への認識を高める。

③私たちができることを考える

ラオスでのNGOの活動の１つとして、「ラオスの子どもに絵本を送る会」の活動を知ったことも大きな収穫であった。２カ所を訪問をさせてもらったが、まだまだ、絵本が足りないということを実感した。知り、考え、学ぶなかで日本でできる活動もたくさんあることを再確認した。

ラオスだけでなく、他の国々にも目を向け、世界の国々について学び、私たちに何ができるかを考え、「共に生きる」という意識を様々な活動を通して育てていく。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限 「JICA」って何？ クイズ「ラオスからサバイディ！ ～ラオスの明日を築く人々～」	①ビデオで、国際協力やJICAについて知る。 ②ラオスという国やそこで生きる人々についてクイズを通して知る。	・ビデオ 「JICAくんの国際協力って知ってる？」 ・パワーポイント　（資料1） ～ラオスの明日を築く人々～ ・JICAからの「任国事情」や現地で撮った写真等 ・クイズの解答用紙
2時限 JICA国際協力出前講座 「本当の幸せとは？」 ～芝田澄子氏の講演より～	①芝田氏の自己紹介 （ラオスで2年間看護師として活動） ②青年海外協力隊について ③ラオスでの学び ④本当の幸せとは？ ⑤今後のこと	・パワーポイント ・ビデオ ・ラオスの民族衣装 ・感想文用紙

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
3時限 〈道徳〉 「貧しさのなかで～ネパール」 国際的視野に立ち、世界中の人々の平和と人類の幸福について考える。	①前時の講演をふり返る。 ②資料「貧しさの中で～ネパール」を読んで話し合う。 ・ネパールの人々の貧しさがどんなものか ・畠中さんの生き方、考え方について学ぶ ③中学生として、日々の生き方やできることを考える。	・暁教育図書 中学生の道徳3 「貧しさの中で～ネパール」 ・青年海外協力隊ネパール任国概況と概要 ・ワークシート
4時限 「舞台はアフリカ！ 青春賛歌！」	青年海外協力隊として、世界の様々な場所で活躍している若者や元青年海外協力隊のその後を追い、国際協力のありかたや彼らの生き方に学ぶ。	・JICAのビデオ ・感想文用紙
5時限 〈道徳〉 「風に立つライオン」 理想の実現をめざして自分の人生を切り拓くことの葛藤と勇気に気づく。	①様々なことを犠牲にしても自分の理想の実現をめざし、アフリカの大地で巡回医師として働く主人公の生き方について考える。 ②自分の将来の夢や理想について考える。	・暁教育図書 中学生の道徳3 ～さだ　まさし 「感動の素」 ・CD「風に立つライオン」～さだ　まさし ・ワークシート
6時限 〈英語〉 フォトランゲージ ラオスの子ども達の生活を知る。	①ラオスの首都のヴィエンチャンの生徒と農村部の生徒の暮らしぶりを写真から読みとる。 ②写真から読みとれる情報を交流し、それらの情報をつなぎ、英語で表現する。	・ヴィエンチャンの生徒の暮らしの写真（開発教育協会） ・ラオスのある農村で撮った5年生の少女の生活の写真（資料2） ・ヴィエンチャンに住む女子中学生の写真。
7時限 〈英語〉 日本の文化に学ぶⅠ 落語について学ぶ。	①ビデオを視聴し、落語について学ぶ。 ②英語の落語を聞く。 ③実際に英語で「大喜利」をしてみる。	・「英語でしゃべらナイト」～NHKテレビ ・ワークシート
8時限 〈英語〉 日本の文化に学ぶⅡ 京都の文化について知る。	ビデオを視聴し、京都の文化について知る。	・「英語でしゃべらナイト」～秋の京都を案内する。 ・ワークシート
9～10時限 〈英語〉 日本の文化に学ぶⅢ 日本の文化を英語で表現する。	今まで習った英語で、日本の文化を表現し、ラオスの中学生に送る。	・色紙　（資料3） ・夏休みのレポート
11時限 〈生徒会活動〉 地雷について学ぶⅠ	文化祭で国際交流委員会が作成した地雷についての紙芝居を全校生徒対象に体育館で上演。 ①地雷が今なお、大きな傷跡を残し人々の生活の大きな障害になっていることを知る。 ②地雷除去のために様々な活動を通し、援助や協力をしている人々がいることを知る。	・「地雷」についての紙芝居 ・大型スクリーン
12～16時限 〈生徒会活動〉 地雷について学ぶⅡ	①地域の方々、保護者、生徒を対象に「地雷」の紙芝居を上演。 ②PTA主催のバザーである「詳徳祭」で国際交流委員会として参加。地雷除去のための募金活動をする。	・「地雷」の紙芝居 ・地雷についての啓蒙活動ポスター ・ビーズ製品
17時限 〈生徒会活動〉 地雷について学ぶⅢ	①近隣の高校で「地雷」の紙芝居を上演。 ②詳徳中学の取り組み紹介。	・「地雷」の紙芝居 ・国際交流委員会作成のレポート

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
18~19時限 〈生徒会活動〉 ラオスに絵本を送る	「ラオスの子どもに絵本を送る会」の活動に参加。 ①各クラスの国際交流委員より、主旨説明をし、クラス全体に協力を求める。 ②絵本回収期間を定め回収をする。委員会で整理をする。	・詳徳中学校国際交流委員会から出している絵本回収についてのプリント（資料4）
20時限 〈生徒会活動〉 書き損じはがきを集める	日本民際交流センターの書き損じはがきを集める活動に参加。	・書き損じ葉書回収の主旨説明と提案を書いたプリント

授業の詳細

1時限

①「JICA」って何？

JICAから借りた国際協力についてのビデオを視聴した。今回、初めてJICAが行っている仕事について知った生徒も少なくなく、「国際協力」について考えたり、今後の学習を進めるにあたり有効であった。

②クイズ「ラオスからサバイデイ！ ～ラオスの明日を築く人々～」

ラオスクイズをした。ラオスにも、JICAや様々なNGOの方々が、ラオスの人々と共に活動し、ラオスの自立を支援しているという内容も入れたクイズにした。（資料１）

■生徒の感想

・ほとんど知らなかったことばかりで、新しい発見がたくさんあった。
今、ラオスも含め、援助が必要な国々がたくさんあることや日本が援助額第１位だということにも驚いた。でも、お金の援助もそうだけど、直接的な交流、ふれあいも大切にしながら、国の発展に協力していることがいいことだと思った。世界中の人々が豊かに、平和になるために、私たちができることは、まずは幅広い視野をもち、様々な国々について知ることだと思った。

2時限

「本当の幸せとは？」JICA国際協力出前講座 ～芝田澄子氏の講演より～

芝田さんは、青年海外協力隊として、2000年７月～2002年７月までの２年間をラオスで看護師として活動された方である。講演の中では、芝田さんのラオスでの学びや、今後のことについて聞くことができた。

■生徒の感想

・ラオスの国の文化や生活の様子がよくわかった。最終的に芝田さんが言われた「このままで良いのでは…。」という意見に心打たれた。世の中には、「気の毒だ。」とか「助けなくては。」という考えがあって 病院や学校の設立などには、確かに援助をする必要はあると思うけれど、彼らは彼ららしい文化や生活を大切にしているのを直接見た芝田さんは、それに魅力を感じたのだと思う。
「本当の幸せとは？」私もこのことについてこれから考えていきたいと思った。

・特に病院に関する話しが印象に残っている。ただの下痢で亡くなるなんて信じられなかった。最後に芝田さんが言っておられたように、ただ物資だけを援助するのではなく、本当に必要なものは何かを考えることが大切だと思う。ラオスの場合、その必要な援助のなかに「病院」があると思う。それもただ病院を建て、派遣された医師のみが対応するのではなく、医療を教えてラオス人医師を育てる等自立の為の支援をすることこそが大切なのでないかと思った。芝田さんの話しを聞いて改めて「国際協力」について考えさせられた。

・芝田さんの言葉にあった「本当の幸せ」について、少し考えさせられた。私達日本人からみれば、ラオスの人たちの生活は考えられないものだと思うけれど、ラオスの人達にしてみれば、それが普通なのだろうと思った。医療や教育等の充実は必要だと思うけれどラオスの美しい自然や文化を大切にしていくことも国際協力なのかなと思った。

3時限

「貧しさのなかで～ネパール」

出典「これが青年海外協力隊だ」三浦朱門　三修社

前時の講演のなかで芝田氏が生徒に問いかけた、「真の幸福とは？」という問いを、この道徳教材で発展させ、世界中の人々の幸福や平和について考え、その実現に努める意識を育てた。

4時限

「舞台はアフリカ！青春賛歌！」(ビデオ視聴)

第5時限目の授業である道徳教材「風に立つライオン」を実施するにあたり、国際協力のありかたや、国際協力に従事する人々の生き方について映像を通して学んだ。

このビデオはさだまさし氏が番組の進行役をつとめ、番組の冒頭には、「風に立つライオン」の曲が流れる。さだまさしの歌に耳を傾けながら、自分はどう生きようとしているのかを、卒業を控えた3年生たちと共に考えた。

生徒の感想

- 「現地の人と同じ暮らしをすれば、同じ病気にかかる。それもいいかな。」というようなことを日本から派遣された医師が言っていたが、共感した。確かに病気にかかるのは嫌なことだが、それで人の気持ちがわかるようになるのなら、それは価値のあることだと思う。僕の将来の夢は、医者でも教師でもないが、できる限りのことをしたいと思う。
- 人には、多種多様な生き方があって、そのことが素晴らしいと思った。技術がなくても自然がある。学校がなくてもいろいろな生き方があると思った。
- いろいろな分野の人たちがアフリカのいたるところで働いていて、みんなすごく強い人達だと感じた。日本から多くの物を援助するだけではなく人と人のつながりも大切だと思った。飢餓に苦しむ人々をいつも想像しているけれど、日本人からも学んだりして町作りに力を入れていることを知り頑張ってほしいと思った。
私は、アフリカへ行って行動できるっていうのはないけれど、学校とか国際交流委員会の活動とかを大事にしていきたいと思った。

5時限

「風に立つライオン」出典「感動の素」さだまさし

ビデオ「舞台はアフリカ！青春賛歌！」から「風に立つライオン」へとつないだ。

「風に立つライオン」の舞台はケニア。村々を巡回する医者のもとへ手紙が届いた。3年前、アフリカに来るとき、彼は日本に恋人を残してきていた。その彼女が結婚するという知らせがきた。意志を貫いてアフリカに来たけれど、葛藤もたくさんあった。

自分の理想に忠実に行動しているように見える人でも、その心の中には無数の苦しみが存在する。悩みながらも自分が信じる道を進もうとするには真の勇気が必要である。旅立った後も彼の迷いは続くが、信じる道を歩み続けるうちに、この道が正しかったことに気づき始める。行動するなかで、真の感動と喜びに出会うことがある。この感動と喜びに励まされながら、新たな勇気が湧いてくることにも目を向けさせたい。

生徒の感想

- この人は、恋人を残してくることにすごく重さを感じていたと思う。きっと自分がその女性に本当に愛されていることを知っていたから。いろいろなものを捨てるのではなく、自分の思ったことをやってみたいというのはわかるような気がする。「風に向かって立つ」見えないものを相手にするのは、すごく怖いし、頼れるものもない。でも、自分で選んだ道だから失敗しても人のせいにできないし、すごい決心がいると思う。ライオンは強いけど、やっぱり怖いこともあると思う。でもライオンはやっぱり負けない。一番だから。
- 人が共に生きるというのはなくてはならないことだと思った。
「よどみない生命を生きたい」ということが「風に立つライオンでありたい」ということだとわかった。自分にとって、本当に大切なものを見つけるのは難しいし、時間がかかることだけどそれを見つけることはとても大切なことだと思った。

6時限

フォトランゲージ

3年生の英語の教科書にバングラデシュの学校の様子について述べている内容がある。ビデオ視聴を通して、バングラデシュでの厳しい生活状況のなかでも一生懸命に生き、異年齢の人々が識字教室で熱心に学ぶ姿は、多くの生徒達に感銘を与えた。この学習を発展させ、今回の授業では、ラオスの人々の生活や学校生活についての写真を見せ、それらの写真を読みとることから始めた。

写真は、大きく分けて2種類を準備した。1つは、ラオスの首都ヴィエンチャンの生徒の暮らしぶりを撮影した写真（開発教育協会作成）と、もう1つは、サバナケットのある農村で、自身が撮影した5年生の女の子の生活の様子を伝える写真である（資料2)。

同じラオスでも都心部と農村部では、まわりの雰囲気も生活の様子も異なるが、家の手伝いをよくすること等では共通点を見いだす等いろいろな意見がでた。まとめとして、生徒達は、それぞれの写真から読みとれたことを英語で表現することに挑戦した。

7時限

日本の文化に学ぶⅠ

3年生の英語の教科書に日本文化についての単元がある。日本文化といっても様々なものがあるが、授業では、「落語」について学んだ。NHKの「英語でしゃべらナイト」を録画しておき、生徒達は英語の落語を聞くことにも挑戦をした。また、実際に英語を用いての「大喜利」もやってみた。

生徒達にとっては、このビデオ視聴は、日本の「落語」が、海を越えて外国の人々にも広まっているということを知る機会となっただけではなく、自分たちの身の回りにある様々な日本の文化について見直し、学ぶ良い機会となった。

生徒の感想

・英語を使うことによって、日本の文化を世界に伝えることに取り組んでいる人がいることを知り、嬉しかった。桂かい枝さんらの努力により外国の人達にも笑ってもらえる落語の存在はとても貴重だとおもった。日本文化の素晴らしさを英語で世界に発信できるものを桂さんにつづいてたくさん発見できたらいいなと思った。

生徒の作品より

「大喜利」～詳徳の頭文字を使って～

Safe	～安全、安心なところです。
Hope	～生徒達の希望にあふれています。
Original	～詳徳独自の雰囲気があります。
Teachers	～素敵な先生方がたくさんいらっしゃいます。
Our	～私たちの自慢の学校です。
Kind	～親切な人達ばかりです。
Useful	～これからの社会に役立つ人達が育成されています。

8時限

日本の文化に学ぶⅡ

私たちが住んでいる京都にも多くの文化がある。NHK「英語でしゃべらナイト」の京都特集を録画しておき、生徒達と共に、京都の文化について学んだ。

海外からも多くの文化が入り、様々な国々の文化に触れることができるのは良いことであるが、「日本の文化」への意識が希薄になっていることを感じることもある。今回の授業では、「日本の文化」について、再認識の場となり、次の「日本の文化についての色紙」作成へのステップとなった。

9～10時限

日本文化に学ぶⅢ

今まで習った英語を用いて、生徒達それぞれが日本文化を表現した。色紙の表に、自分が選んだ「日本文化」のイラストを描き、裏には英語でその文化についての説明と自己紹介を書くことにした。この色紙は、「ラオスに絵本を送る会」（ヴィエンチャン事務所）へ本校で集めた絵本251冊と共に送った。

2月の初旬に、ヴィエンチャン市内にあるサラーカム中学校から、生徒達が描いたラオスを紹介するイラストとメッセージが約50枚届いた。それらの中には、ラオスと日本の友好を描いたものや、ラオスの自然や文化、人々の生活の様子を描いたもの等、

個性あふれるものばかりであった。メッセージは、ラオス語で書かれたものがほとんどであったが、ラオス語とともに、英語で書かれている色紙もあった。生徒達の色紙とサラーカム中学校の先生方やNGO「ラオスに絵本を送る会」のスタッフの方々のメッセージは、校内に展示され、生徒達にも紹介をした。今後もラオスについて学び、サラーカム中学校との交流を続けていきたいと考えている。（資料３）

11時限

地雷について学ぶⅠ

本校には、生徒会組織のなかに各委員会が設置されている。そのなかの１つに、国際交流委員会(International Exchange Body) という組織がある。本校では、IEBと呼んでいる。IEBでは、世界の国々のことについて学び、「平和」に向けての取り組みをしている。１学期には、アフリカのケニア、タンザニアへ送るための文房具を収集した。これは、NGO「ワールドランナーズジャパン」を通して送っており、今年は、10年目を迎える。

２学期には、開発途上国のストリートチルドレン救済のための「友情の５円玉キャンペーン」への参加を呼びかけた。このキャンペーンで集めた募金はNGO「国境なき子どもたち」を通して送金し、子ども達の生活向上のために役立ててもらっている。

３学期には、タイ、ラオスの子ども達の１年間無償援助の取り組みとして、「書き損じ葉書」の回収を行っている。2003年度については、３名のタイの中学生を支援している。これは、NGO「日本民際交流センター」を通し、学費無償援助活動に参加をしている。

本校のIEBでは上記のような取り組みをするなかで、地雷が、今なお大きな傷あとを残し、人々の生活の大きな障害になっていることを学んだ。また、地雷除去のために世界の様々な人々が、援助や協力をしているということも知った。このような学びのなかで生まれたのが、「地雷紙芝居」である。現３年生が、２年生の春休みから制作に取りかかった作品である。絵も物語の内容も全て生徒が手がけた。この「地雷紙芝居」を2003年度の文化祭で上演した。地雷についてIEB委員会から全校生徒への発信ができたことは大きな成果であった。

12～16時限

地雷について学ぶⅡ

地雷についてより多くの方々に知ってもらい、理解をしてもらうために、保護者の方々や地域の方々が参加するPTA主催のバザー「詳徳祭」に参加した。

「地雷紙芝居」の上演と、IEB委員会の生徒達手作りのビーズ製品販売による募金活動もした。学校だけにとどまらず、より多くの方々に地雷について知ってもらい、励ましの声をいただいたことは、今後の活動に向けて、生徒たちにとっても大きな励みとなった。

地雷紙芝居を上演中

17時限

地雷について学ぶⅢ

文化祭やPTAバザーでの「地雷紙芝居」上演に続き、今度は近隣の高等学校で、「地雷紙芝居」を上演した。紙芝居の上演と共に本校の取り組みの様子について話をする機会も得た。高校生に配布用の資料の準備や発表を生徒達でやり遂げたことは成果の１つであった。

また、高校生達の後日の取り組みとして、本校の「書き損じ葉書」キャンペーンを高校でも展開をし、総計425枚という多くの書き損じ葉書を集め、本校まで届けてもらったことは、大変嬉しいことであり、IEB委員会の生徒たちにとっても大きな励みとなった。

16～19時限

ラオスに絵本を送る

各クラスに2名いるIEB委員より、広報紙でクラスに主旨説明をし、クラス全体に協力を求めた。絵本回収期間を定め、絵本を集め、委員会で整理をした。卒業生の中にも協力をしてくれる生徒もおり、総計251冊の絵本が集まった。今年度初めての取り組みであったが、生徒、卒業生、職員など多くの人々の協力が得られたことは大きな成果であった。
(資料4)

20時限

書き損じ葉書を集める

書き損じ葉書を250枚集めるとタイやラオスの生徒が1人1年間無償で学校に行ける。本校では、ここ数年間毎年1月中旬から下旬にかけて、この活動に参加している。今年度は、3人のタイの生徒を支援している。今年度は、校内で役600枚の葉書きが集まった。近隣の高校からの協力もあって、総計約1000枚の書き損じ葉書を集めることができた。校内だけでなく、より広く地域の人々に働きかけることの大切さを学んだ取り組みであった。

成果と課題

今回のラオスへの研修で「開発教育」という新たな分野を知り、実践をすすめてきた。開発教育を1つの限られた分野ではなく、総合学習、道徳、学活、教科そして生徒会活動など、学校現場のあらゆる場面で実践していくことが大きな力になると実感している。

総合学習や学活では、「JICAって何？」のビデオを視聴したり、ラオスで撮った写真をもとにクイズを制作するなど「知る」活動をするうえで、視聴覚教材を利用することは、生徒たちが理解をするうえで大きな助けとなった。また、JICA国際協力出前講座で、青年海外協力隊経験者の方の講演により、現地で働き、ラオスの人々と共に生活した人の「生の声」が聞け、生徒たちにとって新たな「学び」の場となった。

道徳では、3年生は、進路実現の時期と重なっていたこともあり、様々な人生観や生き方について考える時間を設定した。自分の理想に向けて葛藤しながらも、前向きに生きている人々の姿から学び、生徒たち自身も自分の生き方について考える機会となった。

教科では、ラオスで撮影してきた写真をフォトランゲージ教材の導入で活用した。教科の学習指導でも視覚に訴えることは有効であった。

また、日本の文化への意識を高めるためにも、時間をかけて自分たちの文化を学習することの大切さを感じた。日本の文化への認識は、世界の文化の「多様性」を理解することにもつながるのである。また、互いの文化を交流することで、様々な諸問題に気づき、さらに互いを理解できることにもつながっていった。

生徒会活動では、委員会活動を活性化させることで、まず、「知る」ことの輪を校内から保護者そして地域社会へひろげることを考えた。今回の取り組みを通して、「知り」「考え」「行動」することが広まれば、こんなにも大きな力になるということを実感した。

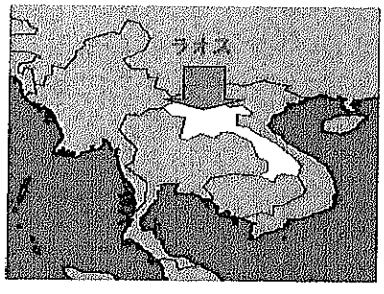
今後の課題として、現在行っている取り組みを継続していくことと、「参加型学習」についての学習方法を学び、現場での実践につないでいきたいと考えている。

開発教育は、「共に生きることのできる、公正な地球社会の実現をめざす」教育である。地球規模の諸問題や現状を知り、構造的要因を考え、自分たちはどのように行動していくべきかを追求していける実践を生徒たちと共にしていきたい。また、「開発教育は、私たちひとりひとりの実践から始まる」という言葉も常に心に留めておきたい。

資料　1時限

1　クイズ「ラオスからサバイディ！」～ラオスの明日を築く人々～

問題１：です
ラオスは5つの国に囲まれています。
ミャンマー・中国・
ベトナム・タイ
あとひとつはなんという国ですか？



問題７：です
ラオスの国民の１年間の
平均所得額は
つぎの３つのうちのどれですか

A:約１２００ドル
B:約５７０ドル
C：約３３０ドル

問題１１：です
ラオスの学校制度は　小学校５年
中学校３年　高等学校３年です。
就学率は　小学校が１１６％。
これは学齢以上の生徒が在籍しているからです。
中学校は３６．４％。では、高等学校への就学率は
次のうちどれでしょう？

A：約２５％
B：約１５％
C：約１０％

問題１２：です
ラオスの15歳以上の識字率は
（文字が読めて書ける）
次のうちのどれですか？

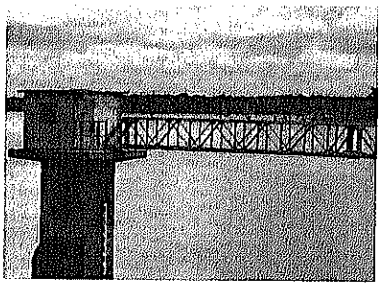
A:約60%
B:約40%
C:約20%

男性は73．5%
女性は47．9%

奥地に行くと、いまだに
男子しか教育を受けられない
地域もあります

問題１６：です
・ナムグム発電所では国内への電力供給だけでなく、産業の乏しいラオスにとって電力は貴重な輸出産業となっています。では、電力は、次の3つの国のうちどこの国に輸出されているでしょうか？

1．タイ
2．ベトナム
3．カンボジア



問題１６：です
ナムグム発電所は首都ヴィエンチャンへの電力供給を目的として、日本をはじめ多くの国々の資金援助を得て完成した国内最大の水力発電所です。広大な貯水池は琵琶湖の半分以上もあります。

資料　6時限

2　「フォトランゲージ」ラオスのある農村の少女の生活

クアちゃんと彼女の妹と弟
彼女は7人の兄弟姉妹の2番目

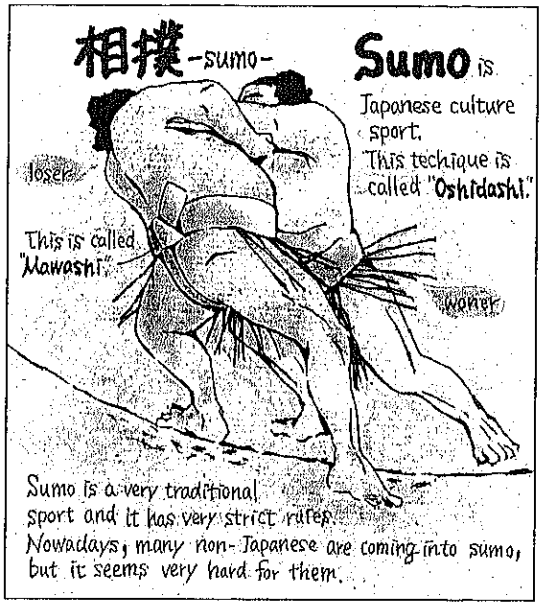
クアちゃんの弟。竹割りをして家のお手伝いをしていた

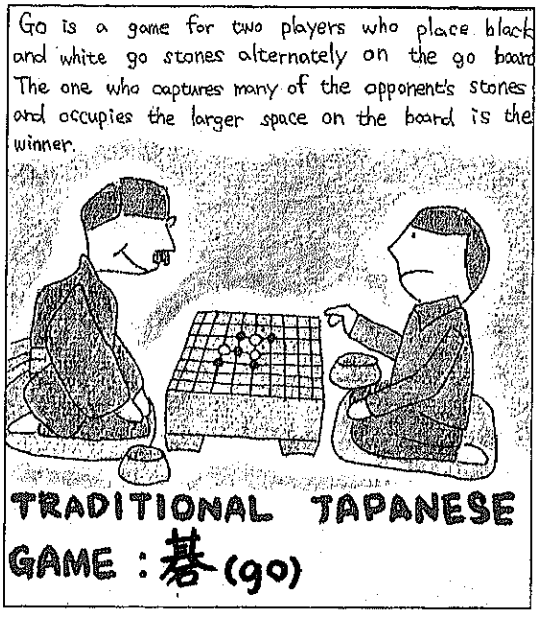
クアちゃんの家の台所

資料　9～10時限

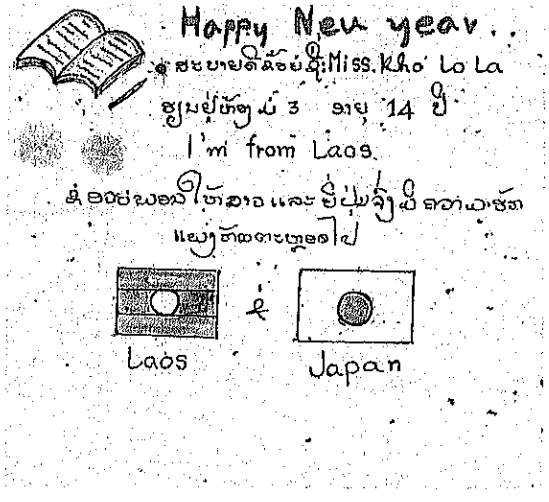
3 「日本の文化に学ぶⅢ」日本の文化を英語で表現し、ラオスの中学生へ送る

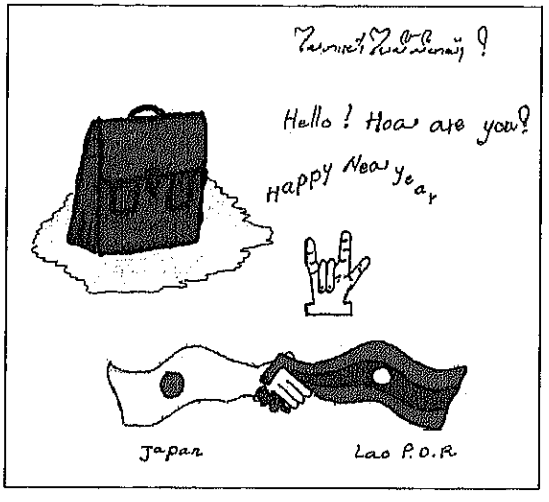
（生徒作品より）





（ラオスから送られてきた生徒作品より）





ラオス Laos

資料4　18～19時限
国際交流委員会で作成した絵本回収の提案プリント

参考資料

・「開発教育ってなあに？」 ～開発教育Q・A集～　　開発教育協会
・「つながれ開発教育」　～学校と地域のパートナー事例集～　　開発教育協会
・開発教育・国際理解教育ハンドブック　　財団法人 国際協力推進協会
・新しい開発教育の進め方Ⅱ　難民　　開発教育研究会編著　古今書院
・平成12年度、13年度中学校教師　海外研修に参加して　　国際協力機構
【授業で使った資料・教材の入手先】
・ビデオ「JICAくんの国際協力って知ってる？」
　JICAプラザは http://www.jica.go.jp/plaza/index.html または各国内機関（巻末資料参照）
・青年海外協力隊ラオス任国概況と概要（任国事情）
　JICAホームページ（国別生活事情）http://www.jica.go.jp/ninkoku/index.html

参加動機およびプロフィール

私は開発教育を進めていく中で、実際に現地へ行って、学んでみたいという思いをずっと持っていました。ラオスでの多くの方々との出会い、今回の研修に参加される先生方との新しい出会いも楽しみにしていました。今回のラオス訪問を機に、ラオスに絵本を送る活動やラオスの中学校との交流も始まりました。これからも、「Take actions!」を合い言葉に生徒達と共に学んでいきたいと思います。

南の国のフルーツから

増田　聖 MASUDA KIYOSHI
理科
高松市立木太中学校（香川県）

実践教科　総合的な学習の時間
時 間 数　17時間
対象学年　3年生
対象人数　25名

カリキュラム案

実践の目的

第3学年では「総合的な学習の時間」に国際理解、福祉・ボランティア・平和・人権の各コースに分かれ卒業研究（個人・グループ学習）を進めていく。その際のメインテーマは『よりよい「共生」社会を目ざして』である。国際理解コースのひとつとして「南の国のフルーツから」コースを設定した。日本と経済的、歴史的にも関わりが深く、また多くのフィリピン人が日本で生活する現状にありながら、あまり理解されていないフィリピンとの関わりを題材に国際理解についての学習を進めた。他の国（フィリピン）を理解することは、異なる文化や伝統の理解であり、まさしく人の理解である。ここでは相手国の人やそこで活躍するJICAやNGOの人たちの生き方から人の理解を進め、「共生」社会の大切さを感じ取った。また学習の進め方では、自ら課題を設定し学習する姿勢を目ざした。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限 南の国のフルーツを知ろう！ マンゴーなどのフルーツを通してフィリピンに興味をもつ。	①マンゴーなど身近なフルーツに東南アジアからのものが多いことに関心を持つ。 ②マンゴーを自由に食べ、その食べ方などからフィリピンへの関心を持つ。 ③アンケートをとり、フィリピンのイメージを把握する。	・インターネット検索 ・ビデオ（「あいのり」日本テレビ） ・自作アンケート
2時限 フィリピンについて考える	①アンケート結果の確認をする。 ②フィリピンはどんな国か、教師が調べた話を聞く。 ③フィリピンについて各自が調べてみたいテーマを考える。	・アンケート集計 ・フィリピン関係の書籍 ※参考文献参照
3～4時限 各自のテーマについて調べ関心を深める	①テーマについて調べ方を考える。 ②各自で書籍やインターネットなどでテーマについて調べ関心を深める。	・インターネット検索
5～6時限 調べたことを発表し合い内容を深める	①中間報告として、前時までに調べた内容を紙面で発表する。 ②友人の発表内容についての疑問点や詳しく知りたい点などの意見を述べる。 ③友人の疑問に答えられるようにさらに詳しく調べる。 ④食物をテーマに調べたグループの指導で、「ハロハロ」作りに挑戦する。	・ワークシート　（資料1） ・ハロハロ用材料

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
7時限 交流会の準備をする	①調べたことを発表できるようにまとめる。 ②フィリピン人の講師に対して、フィリピンに関する疑問と日本（地元のことでもよい）についての説明を準備する。	・ワークシート
8～9時限 交流会	①フィリピン人の講師を迎え、調べたことの発表と、フィリピンの生活の様子などの話を聞く。 ②各自が自己紹介と質問を行い、フィリピンについての理解を深める。 ③バンブーダンスなどに挑戦する。	・ワークシート　（資料2） （遊び道具、バロン、国旗、コイン、バンブーダンス）
10時限/夏休み 日本とフィリピンの関わりを調べる計画（サマーチャレンジ）を作る	①JICAやNGOなどが国際協力のためにフィリピンに関わっていることを知る。 ②フィリピンと日本の関わりを調べるための課題と計画をつくる。 ③夏休みに各自の課題について調べる。	
11～12時限 サマーチャレンジの発表会	①サマーチャレンジで調べた内容を発表する。 ②国際協力や支援の必要性を話し合い、その必要性を学び、フィリピンの抱える貧困などの問題点なども知る。	・ワークシート　（資料3）
13～14時限 協力隊やNGOの人々の活動を知る	①協力隊やNGOで働く人々の生き様から国際協力の考え方を学ぶ。	・教師海外研修資料 JICA・NGOの活動の資料とビデオ（教師撮影）
15時限 国際理解と支援について ・国際協力について各自が感じたことをまとめる。	①前時の学習で学んだことをもとに、海外で活動する人たちの目的、熱意について考えその生き方を話し合う。 ②将来に自分自身が関われる国際理解を考えてみる。	・ワークシート　（資料4）
16～17時限 国際理解の発表会	①各コースで学習した内容を発表する。 ②パネルセッションで関心のある内容について相互に質問討議する。	・学習編集ビデオ　（資料5） （教員、生徒共同製作）

授業の詳細

1時限

南の国のフルーツを知ろう！

・卒業研究（学習課題の提示）の方法を知る。

・フィリピンについてのポジティブなイメージを大切にしながら、人やフルーツを通して、日本との関わりの深さの一部を学習する。

2～4時限

フィリピンについて考える 各自のテーマについて調べ関心を深める

・興味関心ある分野について、個人で課題を設定し、学習を進める。その中から疑問点を感じ取る。

5～6時限

調べたことを発表し合い内容を深める

・中間報告会を行い、調べ方やまとめ方の技術につ

交流会ではバンブーダンスに挑戦

いて学習する。

・なかまの発表を聞いて、より多くの分野について興味関心を持てるようにする。

・食生活をテーマにしているグループによる指導のもと、日本との関わりが深いデザート作りに挑戦し、フィリピンが身近な国であるという印象を持つ。

7～9時限

交流会の準備・交流会

・交流会の準備を通してフィリピンをより身近なものにするとともに、自分自身が調べたことにさらに深まりを持たせる。

・フィリピンの人との交流を通してフィリピンをより身近に感じるとともに、人と人との関わりの大切さを感じる。

10時限＋夏休み

日本とフィリピンの関わりを調べる計画を作る

・夏休みの課題として、日本とフィリピンの関わりを調べるための計画を各自で作成する。

サマーチャレンジ －夏休みを利用しての個人研究－

11～12時限

サマーチャレンジ発表会

・サマーチャレンジで調べた各個人の成果を共有する。

バンカーゲームの様子

13～14時限

協力隊やNGOの人々の活動を知る

・日本からフィリピンに派遣されている協力隊やNGO組織で働く人々の生き様から、国際協力の考え方を学ぶ。

・バンカーゲームで南北問題について考えてみる。

・フィリピンでのJICA、NGOの活動の概略を学習する。

・JICA教師海外研修での写真やビデオを見ながら、海外で活躍する人の生き様について考えてみる。

15時限

国際理解と支援について

・個人研究での取り組みと、学習を通して学んだことや感想をまとめる。

・日本の国際協力について考え、各自が感じたことをまとめる。

16～17時限

国際理解の発表会

・今までの学習をビデオに編集して、卒業研究発表会で学年全体に紹介する。

・他のグループの発表内容について、感じたことをまとめる。

生徒の感想（15時限の感想より）

・ぼくが最初にフィリピンと聞いて思ったのは、バナナやマンゴーといった果物、そしてハロハロであった。さらに「あいのり」で見た国のイメージは日本ほど豊

かではなく、治安も悪いものの、美しく明るいところだと思っていた。そのため、フィリピン社会の抱えている問題を知ったときはそのギャップに驚いてしまった。

ストリートチルドレンやゴミを糧に生活する人々の存在はとても信じられるものではなかった。…略…
ぼくは他国を知るということは良いところばかり見るのでなく、あまり見えない悪い部分もしっかりと見つめ、理解することが大切だと思った。
もう一つ印象に残っているのはボランティア活動を行う人々の存在である。多くの人が、特に若い女性の人たちが前述のような人々の生活を支援しているのに驚いた。…何年もボランティア活動を続けていることは素晴らしいと思った。「笑顔があるからやっていける」という彼女のような存在に世界は支えられているのでないだろうか。…ぼくが言いたいのは国としてのしきいを超えて大きな問題に自分の意志で取り組むことができる人、そんな人こそ、本当の国際理解ができている人と言えるのでないだろうか。

・フィリピンについていろいろなことを調べました。長尾さん（交流会の講師の先生）が来てくれて楽しいことを教えてくれたけど、日本との関わりを勉強するなかで悲しいこともありました。ビデオ（研修で教師が撮影したパヤタスの問題など）を見て、子どもでも毎日働いてくらしている子がいたり、外で生活している子がいるので、私たち自身の幸せを感じました。今回勉強したことで日本が国やボランティアの人々の活動でいろいろな援助をしていることを知りました。日本で生活している自分自身の幸せをしっかりと受け止め、苦しいことがあれば今回の勉強を思い出し頑張ろうと思いますし、将来、自分も苦しい生活をしている人の手伝いができないかを考えたいと思います。

・Imelda長尾さんの話を聞いて、フィリピンはとても貧しいということがわかったけど、でも決して行きたくないとは思いませんでした。なぜかと言うと、貧しいからこそ、そこしかない大切なものや人の温かさがあると思ったからです。ビデオで見たけど、お金がないからゴミの山で暮らす人はだれが見てもかわいそうだと思います。私も実際はそう思いました。でもよく見るとそんな人々も笑顔であふれています。私は最初それを見たときにはなんで？と最初はとても不思議でした。でも、彼らはそこでくよくよしても何も意味がないし、きっと明日のことを信じているからくじけないんだと思いました。そこで働く日本のNGOの人たちの話からそのことが理解できましたし、JICAやボランティアとしてフィリピンで頑張る人たちも、そのことを信じて活動していることがよくわかりました。
日本での生活はとても恵まれているなと強く心に思うことが大切です。…略…。将来外国に行く機会はあると思いますが、そんな時には、この総合の時間のことを思い出し、人との交流の機会をぜひ持ちたいと思います。

成果と課題

「フィリピンはとても良いところです。…」「…将来自分自身ができることを、その時期が来たときに考えられるように生きていきたい。…」といった生徒の感想から、授業のねらいの一部が達成できたことを感じる。中学生が国際理解を学ぶとき大切にすべきことは、その国とその国の人を好きになれることがポイントと考える。

過去にも同じ中学３年生で、フィリピンを題材にストリートチルドレンの問題を学習したことがあった。目的は「南北問題の一部を理解し、ボランティア活動の一つを知ること」そして、「将来自分自身を見つめ、他者との関わりで自分ができることを考え、共に歩む姿勢を身に付ける」ことであった。その際の反省点は、テーマについての学習に終始したために、フィリピンにたいしてマイナスのイメージを強く持たせてしまったことである。生徒の感想のなかには、「日本に生まれて良かった」といったものが多くあった。フィリピンについては、メディア報道でもプラスイメージが少ない。フィリピンの人へのイメージも他のアジア諸国と比べても決して良くなく、問題を取り扱うことは、そのことをさらに助長しているのではと不安を感じた。

そこで、今回授業の導入では、おいしいフルーツや美しい海、あたたかい人々などをいろいろな形で幅広い情報を提供し、生徒にフィリピン自体に興味関心を持たせた。その後、フィリピンの方との交流会では生活や遊び方など子どもの理解しやすい話題でさらに身近な存在として感じられることを特に配慮した。今回の教師海外研修での目的を海外で活躍する、JICAやNGOの人々の「思い」に絞り情報を集め、資料を頂いた。また、同じ夏休みの期間に子ども達は、日本とフィリピンの関わりを「サマーチ